

D. 研究委員の考察

I. 仲原りつ子研究委員による考察

使命感とワークライフバランス

はじめに

ここ数年、保育現場は常に新しい取り組みに追まわられてきた感がある。

保育指針の改定にともなうたび重なる学習会、保育課程や個別指導計画の作成、自己評価チェックリスト、第三者評価受審に向けた取り組み、苦情解決、危機管理対策マニュアルの作成等。一年がまたたく間に過ぎていく。以前に比べて事務量が増えた。業務も多岐にわたるようになった。延長保育、障がい児保育、一時保育、休日保育、病後児保育、保護者支援、地域の子育て家庭への支援…。「土曜日が半ドンだったころがなつかしい」「昔はもっとのんびりしていた」「いつまで続けられるかな、最近、肩や腰にガタがきている」…。子どもと接するこの仕事が好きだから、できるだけ長く続けたい。が、時間的にも体力的にもきついものがある。そんな保育士たちの切実な思いが伝わってくる。

園長会では「年度途中で保育士の補充が必要になったが、ハローワークや新聞の求人欄に広告を出しても、保育士が一人も応募してこない」。集まるたびにそんな嘆きの声がきこえる。養成校では保育士の資格を取得しても、卒業後の半数が他の職種に就くともぎいた。時差出勤や長時間労働、責任の重さに見合わない給与等がその理由だという。

今回の調査では、保育士の1日（平日）の出勤から退勤までの平均値と勤務時間、そして業務内容を8項目に分け、それにかけた時間を尋ねた。すべての子どもの最善の利益のために、そして、働きながら子育てをしている保護者を支えるために、保育士がどのように時間をやりくりして縁の下の力持ち的業務をこなしているか、さらに、質の高い保育をめざして、いかに努力しているかを浮かびあがらせることができれば、と思っている。

1. 登園（出勤した）時間、降園（退所した）時間、園にいた時間について（表Ⅱ—6）

登園（出勤した）時間は、どの経験年数の保育士も8時14分前後の時間帯で、経験年数による差はほとんどなかった。降園（退所した）時間では、経験年数3年以下が17時59分と最も遅く、最も早い4～10年が17時51分と約8分の差があり、顕著な差ではないが、この差が園にいた時間の差にもなっている。

ここで特筆すべきは、本来8時15分に出勤した場合、退所時間は17時15分になるはずだが、3年以下で44分、4～10年では37分、10年以上で42分と、どの経験年数でも勤務時間を超過し

での勤務実態となっていることである。「保育士は勤務時間が長い」ことが数値的にも明確になった。保育所によって行事の回数は違うものの、行事前の週はさらに超過勤務は増えると思われる。今回、この超過勤務した時間に対して、残業手当が支給されているかどうかの調査はしていないが、もしサービス残業で園に残っているのだとしたら、長時間労働の常態化がストレスとなって、保育士職を続けることが困難な状況をつくり出しているともみることができる。

表Ⅱ－6 経験年数別に見た登園時間、降園時間、園にいた時間の平均値（P.31再掲）

	3年以下		4～10年		10年以上	
	時	分	時	分	時	分
(2)登園(出勤した)時間 ①	8	15.0	8	14.1	8	13.8
(3)登園(退所した)時間 ②	17	59.0	17	51.3	17	56.1
(4)園にいた時間 (②－①)	9	44.0	9	37.2	9	42.2

2. 業務に携わった時間について（表Ⅱ－7－1）

④**保育の時間**（子どもや保護者とかかわっていた時間）は、4～10年が最も長く7時間8分、次に3年以下7時間6分で、10年以上が6時間53分と最も短い。勤務時間のほとんどを直接子どもとかかわる業務にあてているので、保育士にとっては仕事の満足度が高まり、子どもにとっても愛着関係が深まり、情緒が安定すると考える。受け持つクラスの年齢や人数によっては、10年以上の保育士にとっては体力的にきついものがあるかもしれない。

⑤**保育記録を作成するのにかけた時間**と、⑥**保育教材を作成するのにかけた時間**（指導計画の作成、教材研究を含む）の時間を合計すると、3年以下は53分かけているが、4～10年、10年以上、ともに45分と短くなっている。経験年数が増すにつれて、子どもの発達を適切に把握する力や、季節、行事にあわせて指導計画をたてたり、教材を作成する力がついてきた結果と見ることができる。が、子ども一人ひとりの発達状況や発達過程をふまえ、養護と教育を一体的に行なうためには、この45分～53分という時間はあまりにも短かすぎる。その結果、勤務中に取り組むことができなかった記録や評価、保育教材の作成等を家に持ち帰って仕上げざるをえない状況になり、保育士の精神的、身体的負担感は大きいと考えられる。また、保育所の開設時間が12時間以上と長くなった現状では、1人がずっとクラスの子どもたちにつくわけにはいかない。少なくとも2人～3人の保育士が時差出勤して対応することになる。経験年数も雇用形態も違うこの複数の保育士が連携し、きめ細やかなかわりをもつためには、⑤と⑥の時間をもっと十分に確保し、保育内容の質の向上をはかる必要がある。

⑦**事務的な仕事にかけた時間**は、経験年数によって差が出た。3年以下、4～10年は20分程

度だが、10年以上になると33分と多くなっている。事務的な仕事の内容を詳しく知ることはできないが、非正規職員が増えてきている現状で、経験の少ない職員では対応できない事務が10年以上の職員への事務量の増加となっていると考えられる。事務員の配置によって軽減できるものがあれば、その時間を保育に関する業務にあてることができ、保育内容の質の向上につながると考える。

⑧**保育所の掃除や整理にかけた時間**は、経験年数による差はなく、22分程度であった。

⑨**会議、打ち合わせ、報告にかけた時間**では差がみられた。3年以下と4～10年は20分程度だが、10年以上は25分となっていて、これは保育記録を作成するのにかけた時間（22分）や保育教材を作成するのにかけた時間（23分）よりも多くとられている。経験10年以上は、保育の時間（子どもや保護者とかかわっていた時間）が短くなった分、事務的な仕事や会議、打ち合わせ、報告にかけた時間が多くなっていることがわかる。経験年数が増すごとに保育業務以外の業務（職場のリーダー的存在、取りまとめ役としての力量）が求められていると考える。

⑩**休憩時間**は経験年数による差はなく、いずれも30分前後であった。本来ならば昼食時間も含め1時間あるはずの休憩時間だが、実態としてはその半分の時間しかとれていないことがわかる。保育室とは離れたところに休憩をとる部屋が確保されているか等、質的な点についても気になるところである。休憩時間には食事の時間は含まれていないと思われる。園児と一緒に楽しく食事をとることは、保育の一環（食育）として位置づけられているからだ。そして、保育士にはゆっくり味わっている時間はない。子どもの世話や次の活動の準備で手早くすまなくてはならない。保育現場ではこれが普通のこととして通っているが、休憩や食事時間については一考を要するところではないだろうか。

⑪**その他の内容にかけた時間**は、経験年数による差はない。時間も12分前後と短い。業務内容は多種多様だった。保育に入る前の準備、環境整備、日誌、回覧等に目を通す、朝のミーティング、保育士間の連携に必要な担当児の情報交換、共通理解の確認、行事の準備、欠席児童への様子の確認（電話連絡）と園長への報告、室内環境の整備、楽器の練習、道具や遊具の修理、安全マニュアルの検討、保育室の片づけ、電源チェック、戸締り、給食サンプルの片づけ、翌日の保育の準備、読書、駐車場の除草、自己評価チェック、勤務時間に終わらなかった保育記録等々があり、放射能測定という記述には意表をつかれた。昨年3月に東日本を襲った未曾有の地震と津波の時、「決してこの子たちを死なせない」と強い使命感を持ち、子どもたちを守り抜いた保育士たちの活躍が蘇った。保育所が単に「子どもを預かる施設」としての存在ではなく、子どもの命を守り育むために様々な役割と社会的使命をおびていること、そして保育士の仕事がいかに尊く、重要な責務を負っているかをあらためて実感した。

表Ⅱ－７－１ 経験年数別に見た業務に携わった時間の平均値 (P.31再掲)

	3年以下		4～10年		10年以上	
	時	分	時	分	時	分
④保育の時間（子どもや保護者とかかわっていた時間）	7	5.8	7	7.5	6	53.4
⑤保育記録を作成するためにかけた時間	0	26.4	0	22.6	0	21.9
⑥保育教材を作成するのにかけた時間（指導計画の作成、教材研究を含む）	0	26.7	0	22.8	0	23.2
⑦事務的な仕事にかけた時間	0	20.2	0	21.7	0	33.4
⑧保育所内の掃除や整理にかけた時間	0	22.7	0	22.8	0	23.0
⑨会議・打ち合わせ・報告等にかけた時間	0	19.9	0	20.1	0	25.0
⑩休憩時間	0	30.8	0	29.9	0	31.1
⑪その他の内容にかけた時間	0	12.7	0	11.9	0	11.1
合計（「園にいた時間」と同じ）	9	45.2	9	39.2	9	42.3

業務にかかわっている時間を視覚的に表すと図1のようになった。これに仕事の持ち帰りの時間（1時間25分）もあわせると合計11時間となり、調査対象には入っていないが、通勤に要する時間も含めると、保育士は1日のほとんどの時間を仕事に費やしていることがわかる。

図1－① 3年以下 $\left(\begin{array}{l} \text{園にいた時間} \\ 9\text{時間}45\text{分} \end{array} + \begin{array}{l} \text{持ち帰った仕事の時間} \\ 1\text{時間}29\text{分} \end{array} \right)$ 合計 11時間14分

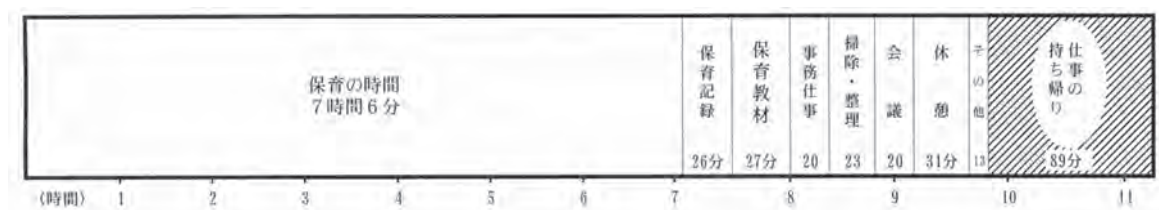
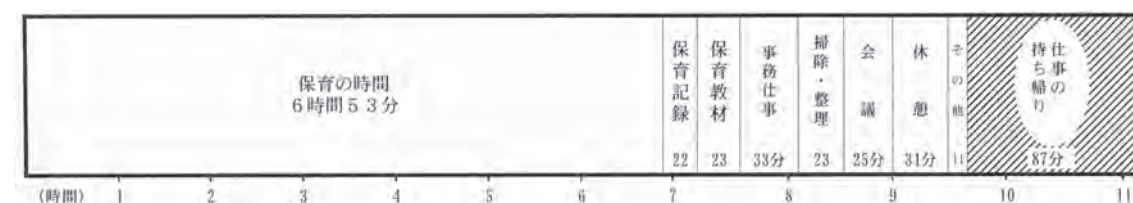


図1－② 4～10年 $\left(\begin{array}{l} \text{園にいた時間} \\ 9\text{時間}39\text{分} \end{array} + \begin{array}{l} \text{持ち帰った仕事の時間} \\ 1\text{時間}21\text{分} \end{array} \right)$ 合計 11時間00分



図1－③ 10年以上 $\left(\begin{array}{l} \text{園にいた時間} \\ 9\text{時間}42\text{分} \end{array} + \begin{array}{l} \text{持ち帰った仕事の時間} \\ 1\text{時間}27\text{分} \end{array} \right)$ 合計 11時間09分



まとめ

今回の調査で、過酷であるといわれている保育士の勤務実態がかなり具体的に明らかになった。自由記述からは、保育業務と事務仕事とのかねあいを模索し、疲弊している状況を訴える声が多くきこえた。

以前、救急病院の小児科医が激務のため過労で倒れ辞職したが、後任の小児科医がみつからなくて社会問題になった。その後、産婦人科医、看護師と、次々と医療現場の人材確保の困難さが明るみに出た。福祉の現場でも介護士不足は周知の事実だが、いよいよ次は保育士もそうなるのか、と危機感を覚える。「子どもが好きだから」「保育士になるのは子どものときからの夢だった」「保育士はやりがいのある仕事だと思った」と、希望にみちあふれて保育士をめざす若者たちの夢をつぶしたくないと心から思う。そして、いま現在、増え続ける一方の業務量と社会的責任の重さに押しつぶされそうになりながらも「子どもといると楽しい」「子どもの成長を日々感じることができ嬉しい」「他の仕事ではえられない充実感がある」と深い愛情と福祉の心で、子どもたちの保育に努力を惜しまない現場の保育士たちに、もっとゆつたりと子どもとかかわる勤務体制を作ってあげたい。もっと専門性を高めるための時間的余裕を作ってあげたい。そして、もっと楽しく仕事と家庭の両立ができるように処遇を改善してあげたい。そんな思いを強くした。

日本の保育士の優秀さは諸外国と比べても決してひけをとらない。そして、一人あたりの受け持ち人数のなんと多すぎるのか。保育士たちが疲れはてて体を壊したり、他の職種に転職することがないように、早急に最低基準を見直し、たとえば3歳児20：1を10：1にする等、保育士1人あたりの受持ち人数を少なくする取り組みをしてもらいたいと切に願う。保育内容の質の向上をめざすなら、まず初めに手がけるのが保育士の処遇の向上をはかることだ。保育士をとりまく職場環境（給与、仕事量、働く時間）の改善がすすめば、やる気のある人材がもっと保育所に集まってくる。結果、保育の質が向上し、未来を担う子どもたちの最善の利益へとつながっていくのである。

Ⅱ. 廣田智子研究委員による考察

保育の現場をささえる保育士の努力と未来への渴望

はじめに

保育士とは、子どもの健やかな育成を助ける専門職である。その育成とは「子どもたち一人ひとりの年齢や発達の状況に応じ、遊びや行事活動・生活体験を通じて、子どもたちの心と身体を助ける」という様々な配慮が必要なものであり、ただ子どもを預かり遊んでいれば良い訳ではない。

2001年に保育士が国家資格となり、今まで以上に保護者対応、子育て相談、地域子育て支援等、専門職として求められる事柄が多くなった。社会の期待もますます高まってきている。しかし保育士の職務内容は広く世間に認知されていないのが実状である。

保育士は社会に貢献できる立派な仕事であるが、世間の評価に報われないことに不満を感じ、離職してしまう保育士もいるので深刻な問題となっている。

保育士の勤務実態を調査し、保育士はどのような職務をこなしているのかを知ることによって、世間との認識のズレがなくなり、より保育士の職務を周知・理解してもらえると幸いである。

勤務実態

1 持ち帰り仕事について

本稿では主に「持ち帰り仕事について」の考察を行う。そこでまず、勤務の実態を把握したいと思う。保育士の勤務実態を把握するために挙げた項目は、一日の勤務時間・業務内容・業務時間(勤務時間内訳)である。

表Ⅱ－6 経験年数別に見た登園時間、降園時間、園にいた時間の平均値 (P.31再掲)

	3年以下		4～10年		10年以上	
	時	分	時	分	時	分
(2)登園(出勤した)時間 ①	8	15.0	8	14.1	8	13.8
(3)降園(退所した)時間 ②	17	59.0	17	51.3	17	56.1
(4)園にいた時間 (②－①)	9	44.0	9	37.2	9	42.2

表Ⅱ－6では園にいた時間が一日の労働時間になるわけだが、いずれの経験年数も大差なく9時間40分程であった。基本の勤務時間は8時間で1時間の休憩時間を入れて、9時間拘束と

考えるのが妥当と思われる。その結果、単純に計算しても1日平均40分の超過勤務になっている。

表Ⅱ－7－1 経験年数別に見た業務に携わった時間の平均値（P.31再掲）

	3年以下		4～10年		10年以上	
	時	分	時	分	時	分
④保育の時間（子どもや保護者とかかわっていた時間）	7	5.8	7	7.5	6	53.4
⑤保育記録を作成するためにかけた時間	0	26.4	0	22.6	0	21.9
⑥保育教材を作成するのにかけた時間（指導計画の作成、教材研究を含む）	0	26.7	0	22.8	0	23.2
⑦事務的な仕事にかけた時間	0	20.2	0	21.7	0	33.4
⑧保育所内の掃除や整理にかけた時間	0	22.7	0	22.8	0	23.0
⑨会議・打ち合わせ・報告等にかけた時間	0	19.9	0	20.1	0	25.0
⑩休憩時間	0	30.8	0	29.9	0	31.1
⑪その他の内容にかけた時間	0	12.7	0	11.9	0	11.1
合計（「園にいた時間」と同じ）	9	45.2	9	39.2	9	42.3

次に経験年数別に見た業務に携わった時間を見てみることにする。業務内容は、保育士として必ず行うであろう項目を挙げた（表Ⅱ－7－1）。

④保育の時間がいずれの経験年数でも、平均7時間と勤務時間の大半を占めた。これは保育士として当然の結果であると言えるが、業務は他に7項目ある。この設問は、携わった時間を専任で行ったものとして記入することになっているはずであるので、一日の勤務時間を8時間とし、7時間が④保育となると、残りは1時間である。1時間で7項目こなすというのは、物理的に無理であるとする。

その結果、休憩時間平均30分、超過勤務平均40分となり、さらに補い切れない部分が「持ち帰り仕事」となる。

「持ち帰り仕事」の有無は以下の通りである。

表Ⅱ－8 いわゆる「持ち帰り」の有無（％）（P.33再掲）

	あり	なし	回答人数
3年以下	48.7	51.3	452
4～10年	49.5	50.5	473
10年以上	56.1	43.9	554
平均（重みなし）	51.4	48.6	1479

ほぼ半数が、「持ち帰り仕事」をしている。持ち帰り仕事「あり」の場合、内容と所要時間を記入してもらったが、自由記述だったため、それを以下の5項目に分類した。

1. 保育の計画や準備に関する内容（以下、計画準備）

例）指導計画、指導案、週案、教材作成、保育の準備、ピアノ、体操、制作、壁面

2. 保育の振り返りに関する内容（以下、振り返り）

例）保育記録、保育日誌、児童票、保育のまとめ、個別記録、経過記録 など

3. 事務的な仕事

例）事務、書類、会議資料、クラスだより、実習生の記録、報告書、台帳、議事録

4. 行事に関する内容

例）運動会、遠足、行事、避難訓練、お誕生会、展示会、祖父母競技

5. その他

例）会議、買い物、借り物、保護者対応、掃除、整理、鍵開け、見回り、縫い物

※P.45再掲

分類された内容例は大まかではあるが、十分に細かく整理されている。これらから、子どもに関わる保育士が行うべき業務の多種多様さが伺える。

表Ⅲ－１ 「持ち帰り」として各仕事の内容を計上した者の割合（％）（P.46再掲）

	計画準備	振り返り	事務	行事	その他
3年以下（N=173）	47.4	26.6	23.7	24.9	2.9
4～10年（N=180）	42.8	27.8	25.6	30.0	1.7
10年以上（N=235）	41.3	26.0	37.0	26.8	4.7

「持ち帰り仕事」として最も多く行われているのは、経験年数に関係なく、計画準備であった（表Ⅲ－１）。

計画準備は、日常の保育に欠かすことのできない、後回しにできないものが多い。したがって、持ち帰ってでも終わらせておかなければならない仕事ととらえることができる。

10年以上の事務仕事の割合が他の2つに比べて多いが、これは経験年数に応じた責任ある仕事を任されているためととらえることができる。

行事にかかる時間が思ったより少なかったように思うが、これは調査の時期も関係しているのだろうと推測する。他に考えられる理由としては、民営の保育園は行事が多いが、公営の保育所は行事が少ない等の関連もあるのではないだろうか。

表Ⅲ－２ 持ち帰り仕事に費やした時間の平均（分）（P.46再掲）

	計画準備	振り返り	事務	行事	その他
3年以下	65.0	61.7	64.9	65.8	27.0
4～10年	64.1	43.8	65.6	79.3	26.7
10年以上	58.9	56.8	66.3	63.9	25.9

持ち帰り仕事に費やした、5項目の時間について見てみる（表Ⅲ－２）。「その他」と4～10年の「振り返り」以外は、だいたい1時間程度であり、内容ひとつずつにかけた時間は長めである。その日にやっておかなければならない仕事を家に持ち帰って終了させるか、ある程度目処をつけたところまでを行っているためだろう。

表Ⅱ－９ 「持ち帰り」仕事の平均時間（P.34再掲）

	時間	分	回答人数
3年以下	1	29.0	191
4～10年	1	21.4	208
10年以上	1	26.5	274
平均（重みなし）	1	25.6	673

経験年数別に見た持ち帰り仕事の平均時間（表Ⅱ－９）は、経験年数に関係なく約1時間25分であった。保育園での平均9時間40分勤務と合わせると、半数は約11時間もの業務をこなしていることになる。保育士の業務の多忙さが伺える。

2 有給休暇について

表Ⅱ－10 有給休暇の取得日数、使用日数、使用率の平均（P.34再掲）

	年次有給休暇の 取得日数	使用日数	使用率
3年以下	14.2	5.2	46.5
4～10年	26.8	7.9	36.0
10年以上	33.8	8.4	28.7
平均（重みなし）	26.2	7.3	35.7

有給休暇の取得日数、使用日数、使用率の平均を見てみる（表Ⅱ－10）。思った以上に有休の使用率が低い結果であった。保育士の頭数は、国が定める最低基準であるところがほとんど

ではないだろうか。休みが入ることで、保育の手が減ることになる。しかしこれでは保育の質の低下につながるため、状況が許さないと考えられる。

おわりに

保育所・保育園が抱えている問題は様々あるが、保育士の求人問題はもっとも切実なもののひとつだろう。

なぜ求人が集まらないのか。処遇等思い当たる節はあるが、それ以前に…保育士という仕事に、そんなに魅力がないということなのだろうか？様々なことが頭の中を駆け巡る。

保育業務を思い出してみると、保育士は子どもたちと接していることが一番多い。乳児は当然のこと、年齢が低い子どもたちは、片時も目が離せずほぼつきつきり状態だ。だからといって他に何もなくて良いというわけではない。例えば、子どもたちが毎日心身ともに健やかに成長するために、指導案を作成する、成長記録をつける、保護者との信頼関係を構築する、楽しい遊びを考える、行事の準備をする、保育室を整える等々、雑用と呼ばれるものでも子どもたちのために行っている。それら全ては「保育」へと繋がっている。

これらの業務は、保育に支障をきたさないように行っていかなければならないものである。矛盾もあるが、そういう理由で保育以外のほとんどのことを勤務外で行うしかないのである。

調査の自由記述には「持ち帰り仕事」に対しての事が多く記載されていた。保育士という仕事は本当に忙しく大変である中で、懸命に保育士たちが子どもたちのために保育の質を高め、社会の期待に応えようと努力している姿勢を強く感じる事が出来た。「保育士」はやはりやりがいと魅力のある仕事なのだと再認識するとともに、今回の調査結果から、保育士の実態・職務内容が社会に広く認知され、正当に評価されるべきだという思いが強まった。広く社会に認知され、正当に評価されれば、様々な人材に門戸を開くことが出来るだろう。

未来を担う子どもたちに良質な保育を提供するためには、保育士の社会的地位の向上と処遇の改善がされなければならないと考える。もちろん私たち保育士も自己研鑽し、努力を続けていくことが必要だが、正当に評価されることにより、さらにより良い保育が行われていくものと確信している。

Ⅲ. 若山望研究委員による考察

“常に子どもの側に立って最善の利益を守ること”

はじめに

“保育士の専門性とは？”と考えると、とても幅が広く、また保育士個人の保育に対する取り組み方や、社会状況による各保育所のサービスの取り入れ方により、かなりの違った価値観があるのではないかと思います。

今回は、保育所保育指針に沿い、保育士に課せられた最低限の専門性について12の業務を挙げ、5段階の評定により各保育士の意識を調査した（資料A）。ここではその結果を考察する。

（資料A）Ⅲ 保育士の専門性について

9. 以下の保育士の業務について、どの程度実施できていると思いますか？該当するものに○をしてください。

	できている	ほぼできている	あまりできていない	できていない	担当していない
①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案	1	2	3	4	5
②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案	1	2	3	4	5
③子どもの一人ひとりの発達の把握	1	2	3	4	5
④保育室の整理整頓	1	2	3	4	5
⑤季節に合わせた保育室などの環境整備	1	2	3	4	5
⑥保育教材の整備	1	2	3	4	5
⑦家庭との連携	1	2	3	4	5
⑧他の保育士との連携	1	2	3	4	5
⑨園長など上司への適切な報告や相談	1	2	3	4	5
⑩栄養士や看護師など他の専門職との連携	1	2	3	4	5
⑪他の専門機関との連携	1	2	3	4	5
⑫地域の子育て家庭への支援	1	2	3	4	5

※調査票より抜粋

①から⑫までの項目は、保育所保育指針に沿い、保育士に課せられた最低限の専門性として考えられる業務である。①と②は、保育士一人ひとりが各保育所の保育方針の基、目の前にいる子どもたちの発達状況に応じ、季節などの周囲の環境なども踏まえ、発達に即した指導計画をたてることを意味している。③は子ども一人ひとりの発達を把握する上での専門知識、④と⑤と⑥は、保育所は人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、環境を計画的に構成し、工夫し保育することや、子どもの命を預かるという重い使命を担っているため、安全面・衛生面などの環境の整備をすることを意味している。

⑦から⑪の項目は、子どもたちを心豊かに健やかな成長発達を促していくためには必要不可欠な項目である。⑫は、保育士の専門性をのばし、さらに子育て支援の技能を活かすことが社会から求められている責務である。

①～⑫のいずれにも共通していることは、“人との関わり”ということである。自己中心的な現代の社会の中で、“子どもたちの最善の利益を守る”という保育士本来の責務を果たそうとするには、大変苦慮の多い内容であることが自由記述（P.130）などから読み取れた。

業務の担当について

「担当していない」が選ばれた割合について（表Ⅱ－11）

表Ⅱ－11を見てみると、全体的に「⑫地域の子育て家庭への支援」と「⑪他の専門機関との連携」が、他の業務に比べて担当していない保育士が多かった。この項目は保育所保育指針の改定後で取り入れられた業務であることから、まだ保育所自体が取り入れていないことがうかがえる。また、たとえ保育所が取り入れたとしても、クラス担任をしている保育士が行うのではなく、園長や主任が担当していることが多いことが推測される。

経験年数による違いでは、⑪⑫の他に、「①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案」と「②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案」を担当していない者の割合が3年以下で多く、10年以上で少なかった。保育課程や年間計画・月案・実践計画などは、日々の保育のねらいや内容の大本になるものであるために、経験を重ねるにつれ求められてくる業務なのであろう。したがって、経験の少ない保育士の担当する割合が少ないのであろう。「⑤季節に合わせた保育室などの環境整備」と「④保育室の整理整頓」は3年以下が担当している割合が多く、経験を重ねるにつれて少なくなっている。日々の生活の場である保育室の管理（転倒防止などの安全・清掃・装飾・室内温度湿度の調整や換気・空気殺菌など）は、経験年数の少ない保育士でもできるし、行いながら気付いて学んでいくことなのであろう。経験の少ない保育士に任せ切るのではなく、経験の多い保育士も一緒に行いながら、保育士としての気付きを育てていけるような取り組みであることを願いたい。

最後に担当していない者が「0.0」という割合に注目してみたい。0.0だったのは、3年以下で「④保育室の整理整頓」「⑧他の保育士との連携」、4～10年で「③子どもの一人ひとりの発達の把握」「⑦家庭との連携」「⑧他の保育士との連携」、10年以上では「⑧他の保育士との連携」と「⑨園長など上司への適切な報告や相談」であった。これらは、保育現場での業務実態を非常によく表している。経験年数が少ない保育士は清掃などの日々の業務が多く、4～10年という経験年数は、現場の中での保育実践で一番中心的な存在になり、10年以上になると園長などの管理職との信頼関係の構築や保育現場との調整という役割が必然的に業務に加わるということである。また、各経験年数により専門性が推移していく過程がよく表れているともいえる。「⑧

他の保育士との連携」は経験年数に関係なく保育現場では必要不可欠であり、チームワークが求められるので、どの経験年数においても連携が行われなければならない。

表Ⅱ－11 「担当していない」が選ばれた割合（％）（P.35再掲）

業務	3年以下	4～10年	10年以上
①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案	7.6	4.1	3.3
②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案	7.3	3.5	3.3
③子どもの一人ひとりの発達の把握	0.7	0.0	0.5
④保育室の整理整頓	0.0	0.4	0.9
⑤季節に合わせた保育室などの環境整備	0.4	0.6	1.7
⑥保育教材の準備	1.3	1.2	1.9
⑦家庭との連携	0.6	0.0	0.7
⑧他の保育士との連携	0.0	0.0	0.0
⑨園長など上司への適切な報告や相談	0.4	0.4	0.0
⑩栄養士や看護師など他の専門職との連携	11.1	9.3	6.9
⑪他の専門機関との連携	31.5	28.2	20.6
⑫地域の子育て家庭への支援	36.3	33.9	25.4

業務実態の程度

業務の実施の程度の平均値について（表Ⅱ－12）

表Ⅱ－12を見てみると、「⑨園長など上司への適切な報告や相談」「⑧他の保育士との連携」「③子ども一人ひとりの発達の把握」がいずれも平均値が低く、業務の実施が「できている」と認識している保育士が多いことがわかる（表Ⅱ－12では値が小さいほど「できている」に近いことを意味する）。この結果は、保育現場において最低限重要な業務項目であるために、大変嬉しく感じた。一方では「⑫地域の子育て家庭への支援」「⑪他の専門機関との連携」の平均値が高く、業務の実施が「できていない」と認識する保育士が多いことがわかった。これらは先に述べた『業務を「担当していない」』の数値が高かったことと関連があるのではないだろうか。それとも、まだその必要性についての認知度が低いことや始めたばかりで試行錯誤している状況にあり、各保育士が「できている」という認識を持つまでには達していなかったのであらうか。したいことが思うように出来ず、どのように取り組んだらよいのか分からないでいるとも考えられる。

表Ⅱ－12 実施の程度の平均値（P.36再掲）

業務	3年以下	4～10年	10年以上	平均
①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案	2.2	2.0	1.9	2.0
②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案	2.0	1.8	1.8	1.9
③子どもの一人ひとりの発達の把握	2.0	1.8	1.8	1.8
④保育室の整理整頓	2.1	2.1	2.1	2.1
⑤季節に合わせた保育室などの環境整備	2.0	2.1	2.0	2.0
⑥保育教材の準備	2.1	2.0	2.0	2.0
⑦家庭との連携	2.0	1.8	1.8	1.9
⑧他の保育士との連携	1.8	1.7	1.8	1.8
⑨園長など上司への適切な報告や相談	1.9	1.8	1.7	1.8
⑩栄養士や看護師など他の専門職との連携	2.1	2.0	2.1	2.1
⑪他の専門機関との連携	2.7	2.5	2.5	2.6
⑫地域の子育て家庭への支援	2.7	2.6	2.5	2.6

経験年数による違いでは、「④保育室の整理整頓」「⑤季節に合わせた保育室などの環境整備」「⑩栄養士や看護師など他の専門職との連携」の3つ以外の全ての項目で、3年以下の数値が他の経験年数より高い。業務の実施が「できている」という認識が、他よりも低いことが分かる。経験年数の低さから自信が持てないために、「できている」という認識を持つことができないのであろう。次の表Ⅱ－13により、これらの内容をさらに詳しく項目ごとに見てみよう。

専門性に関して各段階が選択された割合（表Ⅱ－13）

①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案

「できている」と「ほぼできている」を合わせると、4～10年では83.33%、10年以上では87.05%に対して、3年以下では68.7%と低かった。また、3年以下の「できていない」と「あまりできていない」を合わせると23.69%であった。他の経験年数よりも低い。これは、経験の未熟さから、保育所の保育方針に対する理解度や理解に対する自覚の認識不足があるためであらう。経験が上がるにつれてその認識が高まることが数値に表れている。

②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案

「できている」と「ほぼできている」を合わせると、4～10年、10年以上がともに9割を超えている。3年以下では78.4%と8割近くであった。自己評価が高いことがわかる。そしてこの項目では、「できていない」と答える者が誰もいないところにも注目したい。このことを経験年数順に追って見ると、経験を重ねるにつれ保育に対する自信が出ていることがわかる。しかし先に述べたように、この「できていない」が経験年数を問わずに「0.00%」という数値は、経験を問わずに、子どもの姿や季節に合わせしっかりと計画を立てているという自覚を持っているということでもある。とても誇り高いことであり嬉しく思う。

③子ども一人ひとりの発達の把握

「できている」と「ほぼできている」の合わせた割合がさらに高かった。4～10年、10年以上がともに95%を超えている。そして3年以下でも83.87%という高い割合になっている。②と同様にこの項目でも「できていない」と答える者が誰もいなかった。また、経験年数を重ねることにより自信へとつながり、自己評価も高くなっていることがわかる。しかし、この「できていない」が経験年数を問わずに0.00%という数値、また3年以下の「できている」と「ほぼできている」を合わせた数値が他の項目より一番高かったのは、保育士の専門性の中で最も身近に自己評価につながりやすく、仕事のやりがいに繋がっているのだろう。日々の子どもたちの成長を肌で感じられ、その成長から専門性を学び高められていくことが、実感として自己に返ってくるのであろう。

⑥保育教材の準備

3年以下の「できている」の自己評価が低くなっている。この要因としては、経験の未熟さ、引き出しの狭さや応用の足りなさ、周囲の先輩保育士との比較意識等が入ってしまうことがあるのではないだろうか。しかし、全体的に見れば必ずしも割合が低いわけではなく、一生懸命に取り組んでいることはわかる。

⑦家庭との連携

②③と同様に、「できている」と「ほぼできている」を合わせた割合が高かった。4～10年で94.88%、10年以上で94.85%、3年以下で83.76%であった。この結果から、保育の業務そのものが家庭との連携が不可欠であることや、保育現場において直に必要な専門性であることがわかる。そして、比較的自己評価につながりやすいことを示している。この項目で注目したいのは、10年以上になると「できていない」が0.00%ではないところである。この理由としては、連携の難しさから自己評価が低くなってしまうことが考えられる。

⑧他の保育士との連携

3年以下の「あまりできていない」の割合が高く、自由記述の内容などを考慮すると、まだあまり自己発揮しきれず、うまく連携できていないと感じているのであろう。

⑨園長など上司への適切な報告や相談

やはり3年以下の「あまりできていない」の割合が高かった。これもやはり自己発揮できていないことや、項目の「適切な報告や相談」という言葉につられ、自己評価が下がった可能性があると思われる。

⑩栄養士や看護師など他の専門職との連携

4～10年と10年以上が「できている」と「ほぼできている」の合わせた割合が高かった。これは日頃の保育の中で、食育や保健衛生に関して中堅保育士が担うことが多いことがうかがえる。保育経験を重ねることによる専門性というよりは、経験年数における保育現場での必要性

からくる業務内容なのだろうと考えられる。

⑪他の専門機関との連携と⑫地域の子育て家庭への支援

他の項目に比べて、この2つの項目は極端に「できている」の割合が低い。「できている」と「ほぼできている」と合わせても、一番高い割合だったのは「⑪他の専門機関との連携」10年以上の38.15%であった。これからはこれらの専門性の課題が問われるだろう。

その他、④保育室の整理整頓と⑤季節に合わせた保育室などの環境整備は、3年以下が「できている」「ほぼできている」の合わせた割合が高く、日常の業務が経験の少ない保育士に課せられていることが推測される。

表Ⅱ-13 専門性に関して各段階が選択された割合(%) (P.38再掲)

		できている	ほぼできている	あまりできていない	できていない	担当していない
①保育所の保育方針に合わせた指導計画の立案	3年以下	8.70%	60.00%	23.26%	0.43%	7.61%
	4～10年	13.17%	70.16%	12.55%	0.00%	4.12%
	10年以上	19.00%	68.05%	9.67%	0.00%	3.28%
②子どもの姿や季節に合わせた指導計画の立案	3年以下	17.49%	60.91%	14.25%	0.00%	7.34%
	4～10年	20.45%	70.76%	5.32%	0.00%	3.48%
	10年以上	22.85%	68.90%	4.98%	0.00%	3.26%
③子どもの一人ひとりの発達の把握	3年以下	15.90%	67.97%	15.47%	0.00%	0.65%
	4～10年	25.00%	70.90%	4.10%	0.00%	0.00%
	10年以上	26.98%	68.04%	4.47%	0.00%	0.52%
④保育室の整理整頓	3年以下	18.36%	56.59%	24.19%	0.86%	0.00%
	4～10年	13.76%	59.34%	26.28%	0.21%	0.41%
	10年以上	16.75%	60.51%	21.54%	0.34%	0.85%
⑤季節に合わせた保育室などの環境整備	3年以下	22.17%	55.00%	21.30%	1.09%	0.43%
	4～10年	20.49%	53.48%	24.59%	0.82%	0.61%
	10年以上	19.59%	58.59%	19.24%	0.86%	1.72%
⑥保育教材の準備	3年以下	14.32%	58.35%	25.60%	0.43%	1.30%
	4～10年	16.46%	64.81%	17.28%	0.21%	1.23%
	10年以上	18.02%	64.99%	14.90%	0.17%	1.91%
⑦家庭との連携	3年以下	16.23%	67.53%	15.58%	0.00%	0.65%
	4～10年	21.93%	72.95%	5.12%	0.00%	0.00%
	10年以上	22.81%	72.04%	4.29%	0.17%	0.69%
⑧他の保育士との連携	3年以下	28.63%	58.79%	11.71%	0.87%	0.00%
	4～10年	32.72%	61.35%	5.73%	0.20%	0.00%
	10年以上	30.14%	61.64%	7.36%	0.86%	0.00%
⑨園長など上司への適切な報告や相談	3年以下	26.19%	59.52%	13.64%	0.22%	0.43%
	4～10年	31.08%	61.76%	6.34%	0.41%	0.41%
	10年以上	34.93%	57.88%	6.85%	0.34%	0.00%
⑩栄養士や看護師など他の専門職との連携	3年以下	19.96%	41.21%	23.86%	3.90%	11.06%
	4～10年	21.19%	49.79%	16.87%	2.88%	9.26%
	10年以上	19.79%	51.22%	18.58%	3.47%	6.94%
⑪他の専門機関との連携	3年以下	4.60%	22.32%	31.51%	10.07%	31.51%
	4～10年	4.41%	29.83%	33.82%	3.78%	28.15%
	10年以上	6.27%	31.88%	37.63%	3.66%	20.56%
⑫地域の子育て家庭への支援	3年以下	3.74%	19.56%	31.87%	8.57%	36.26%
	4～10年	3.74%	22.45%	33.47%	6.44%	33.89%
	10年以上	6.06%	28.89%	33.74%	5.88%	25.43%

おわりに

本稿「はじめに」で述べた通り、この調査における「保育士の専門性」とは、保育士に課せられた業務において最低限必要な項目を挙げたものである。分析結果から、日々の保育の中で、子ども達の事を考え、安全に且つ一人ひとりの発達を促し確認していくという業務に関しての自己評価が高く、力が発揮されていることがわかった。保育士は“子ども達の為に一生懸命尽くしている”といえる。とても誇りに思えることである。しかし一方では、「⑪他の専門機関との連携」「⑫地域の子育て家庭への支援」の自己評価の低さや、業務として担当をしていない者が多いということに対しては、かなり深刻に受け止める必要があるだろう。今後の課題であるといえる。

社会と国が求める保育士の専門性とは、この最低限のレベルではなく、子どもたちを安全に生活支援するための医学的な知識（身体面・精神面）や人間性を問うソーシャルワーカー的な素質など、より質の高い専門性である。全国にいる保育士の中には、この専門性を発揮している者も多くいるだろうと思う。例えば、様々な子育て家庭における問題に誠心誠意に向かい合っ心て心を寄せ、時に苦慮することがあってもあきらめずに時間を費やし、安定していく家庭の様相に逆に励まされ、さらに一層努力し続けている保育士である。

子どもたちを取りまく社会状況は、現在とても複雑である。児童虐待や育児困難家庭・精神疾患を患う保護者の増加、それに伴う愛着形成不全の子どもたちや発達障害が疑われてしまう子どもたちの増加など、現場の保育士達の直面している現実はかなり複雑で対応が難しくなっている。医師や保健師、地域の子ども家庭センターや児童相談所、子どもたちが就学する地域の小学校・教育委員会など、他機関との連携が今や必要不可欠である。

一人ひとりの保育士が自己評価を高め、目の前の保育を通して自信を積み重ねてほしいと思っている。また、子どもたちのみならず、保護者や地域の子育て家庭、他機関との連携にもその力を発揮して欲しいと思う。

育児困難家庭の地域カンファレンスに参加していると、親子にとって保育園が大変重要な役割を果たしていることがよく分かる。例えば、この地域カンファレンスでは各機関が専門的な立場から、親子への対応と役割を分担していくことになるが、保育園が一番身近な存在として親子に関わり、保育士の温かな人間性により親子の心に安定を与えていくことをとてもよく感じる。保育士たちの心豊かな人間としての成長が、多くの子どもたちやその家族たち、さらに地域の親子の心の支えとなり、一層社会に重要な役割を果たす存在になっていくことを願いた

い。また、保育士たちの日々の努力が社会に浸透し、心温かい人間性溢れる社会の実現に貢献できることを願いたい。

どのような社会状況においても、保育士たちが子どもの側に立って最善の利益を守っていくこと、それが一番の専門性であり、責務であると思う。

Ⅳ. 豊永せつ子研究委員による考察

保育士の醍醐味と誇り

はじめに

「保育士」の仕事には、高い専門性が求められる。その「保育士」になろうと志した動機はさまざまであろう。例えば、「子どもが好き」「出逢った保育士にあこがれを持った」という理由の他に、自分が親から受けた暴力、体罰、育児放棄という辛い体験から、子どもを守りたいという気持ちが芽ばえ、保育士を選んだ人もいるであろう。このようにさまざまな動機があったとしても、保育士とは「心」をなりわいにする職業であることは言うまでもないだろう。

保育士は子どもの命を守り育てる気高い仕事であるが、就労形態も不規則で過酷な割には、社会的地位も低く、労働時間と報酬が相応しないという現実がある。しかし今回、満足度・意識の調査にあたって設定した項目「勤務体制」「仕事の内容」「報酬」「人間関係」(資料A)では、「満足している」と「まあまあ満足している」を合わせると、70%～90%と高い割合であった。

世界経済の低迷や日本の不況からくる失業者の増加、また東日本大震災で多くの命を失った悲しみと衝撃の中にあっても、保育の仕事に就いているという誇りを見失わず、日々保育の専門性を高め合い、子どもの成長を直接見、共に喜びをわかち合い、仲間と支え合っているということに感謝しなければならない。また、子どもとの関わりの中で培われる保護者との信頼関係づくりは、保育士にとっては醍醐味といえるが、最近では、親の価値観の変化、育児機能の低下などからくるトラブルが年々増加し、保育士の精神的苦痛が大きくなっているということを、自由記述 (P.130) から是非読み取ってほしい。

(資料A) Ⅳ 満足度・意識について

10. 以下の項目について、どの程度あなたは満足していますか。該当するものに○をしてください。

	満足している	まあまあ満足している	あまり満足していない	満足していない
①現在の勤務体制	1	2	3	4
②現在の仕事内容	1	2	3	4
③現在の仕事に対する報酬 (給与)	1	2	3	4
④保護者との人間関係	1	2	3	4
⑤同僚との人間関係	1	2	3	4
⑥上司との人間関係	1	2	3	4
⑦保育士としての自分の成長	1	2	3	4
⑧自分がかかわった子どもに対する保育	1	2	3	4

※調査票より抜粋

満足度、意識について

満足度の評定値の平均（表Ⅱ－14）

資料Aに示した8つの項目を設定し、保育士の満足度、意識について調査をした。その結果は表Ⅱ－14である。この表では、値が小さいほど「満足している」に近いことになる。

●経験年数3年以下の保育士について

経験年数3年以下（以下、3年以下）の保育士の①～⑥の項目が、経験年数4～10年未満（以下、4～10年）・経験年数10年以上（以下、10年以上）に比べ満足度が高かった。おそらく最初に出合った職場での仕事内容から、保育士としての仕事に不平、不満を感じるのではなく、どちらかといえば保育士としての未熟さを感じてのことだろう。したがって保育士としての未熟さから、⑧自分にかかわった子どもに対する保育の満足度が4～10年と10年以上と比べると低いのだろう。④保護者との人間関係は、平均値の1.9であった。まあまあ満足しているであろう。⑤同僚との人間関係や⑥上司との人間関係は良好のようだ。3年以下の保育士は新人とあって可愛がられ、保育士自身がそれに対して満足しているのだろう。また、生活の自立へ向けて第一歩を踏み出したばかりであるので、報酬に対してはまだ満足度が高いと思われる。

●経験年数4～10年の保育士について

4～10年の保育士は、園の中核をなし、リーダー的存在にある。また、若い世代の保育士の手本とならなければならず、先輩保育士として受ける期待も大きくなり、その間にこれでいいのかと自分への厳しさを持つ。仕事に対する責任も重くなるので、それに見合う報酬となるとあまり満足しているとはいえないようだ。さらに、年齢的にも女性は結婚適齢期を迎えたりする時期にもある。子育てと就労の両立を支援したりする仕事に就きながらも、実は自分自身がサポートされたい側でもある。それに精神的負担も加わることによって、報酬への満足度は不満に変わるのかもしれない。

●経験年数10年以上の保育士について

10年以上の保育士は、主任保育士やクラスのリーダー的存在である。今まで直接子どもに関わりをもっていた保育士は、子育て支援で外部との交渉に携わったり、実習の担当となったり、あるいは小学校との連携、また中学校の体験学習受け入れの担当となるなど、今までの保育経験と異なる体験をする。広い視野でもって、自分の成長を見ることが出来る立場にあるともいえる。前述したように、10年以上の保育士は主任保育士やクラスのリーダー的存在である。したがって職場での役割は、人間関係を円滑にすることであり、それが今の自分の使命ではないかと考え、同僚や上司の人間関係において、心くばりを意識的に行わなければならない。これらに関連する②現在の仕事の内容や⑤同僚との人間関係を見てみると、少し自身に厳しい評価をしているように思われた。

今回の満足度の評定値から読みとれることは、職場の人間関係を築くことにより、仕事の内容が充実し、満足度が高くなるということである。上司や同僚との人間関係を深めることによって、自分の意見を自由に述べたり、聞いたりして、保育に対する共通認識や理解を深め、さらには保護者の人間関係にもつなげて保育をしていることがうかがえた。仕事に対する報酬には満足していないことや不満を持つということに対しては、自分の未熟さなのではないかと自分自身を責め、自分の成長の満足度を低下させているからではないかとも推測する。移りゆく保育界の変化にとまどいながらも、子どもの成長が直接よく見えるだけに、自分の成長には厳しい目を向けているのだろうか。

表Ⅱ－14 満足度の評定値の平均（P.39再掲）

	3年以下	4～10年	10年以上	平均（重みなし）
①現在の勤務体制 N	1.8 463	2.0 488	2.0 586	2.0 1537
②現在の仕事内容 N	1.7 461	1.9 488	1.9 584	1.8 1533
③現在の仕事に対する報酬（給与） N	2.2 463	2.4 487	2.2 585	2.3 1535
④保護者との人間関係 N	1.9 462	1.9 488	1.9 585	1.9 1535
⑤同僚との人間関係 N	1.6 457	1.7 489	1.8 584	1.7 1530
⑥上司との人間関係 N	1.7 461	1.8 463	1.8 582	1.8 1530
⑦保育士としての自分の成長 N	2.7 463	2.5 488	2.4 585	2.5 1536
⑧自分がかかわった子どもに対する保育 N	2.4 462	2.2 489	2.1 582	2.2 1533

満足度に関して各段階が選択された割合（表Ⅱ－15）

表Ⅱ－14をさらに詳しく、各評定段階が選択された割合で見てみよう（表Ⅱ－15）。

①現在の勤務体制

「満足している」と「まあまあ満足している」を合わせると、経験年数を問わず約80%の保育士が満足をしていた。これは大変喜ばしいことである。特に、3年未満の保育士が85%を超えている。10年以上の保育士の「満足している」を見ると20.82%と低いが、「まあまあ満足している」を見ると58.87%とどの経験年数よりも高かった。4～10年を見てみると、「満足している」25.61%と「まあまあ満足している」53.28%を合わせると78.89%の保育士が満足してい

た。子育て中の保育士にとっては、早朝勤務や遅番勤務は家庭との調整が困難になる。もし満足度を低下させる要因があるとするならば、まずはこのことも関連しているのではないかと思う。

②現在の仕事内容

3年以下の保育士の「満足している」と「まあまあ満足している」を合わせると90%以上が満足をしていた。まだまだ未熟なのに満足度が高いということは、同僚や上司の支援があつてのものと思われる。また、複数の保育担当者の中の一人でもあるだろうし、責任ある役割についていないことも理由の一つとして挙げられるだろう。

4～10年さらに10年以上になると「満足している」が低くなるが、仕事の内容が責任ある仕事になり、勤務時間内に仕事が終わらず、家に持ち帰る人も多いのだろう。自由記述の中にもあったが、困っていることの一つに、仕事を持ち帰らないと仕事が追いつかないつらさを述べていた。

③現在の仕事に対する報酬（給与）

10年以上の保育士の「満足している」は、17.78%とどの経験年数よりも低いが、「まあまあ満足している」を合わせると61.16%であった。同様に3年以下の保育士を見てみると62.85%、4～10年の保育士は54.62%であった。保育士は経験年数で報酬が格付けされ、徐々にではあるが昇給が保障されている。4～10年の保育士の割合が低いのは前に述べたとおりであるので、ここでは割愛したい（P.69参照）。

全体的に見てみると、経験年数が増えるとともに、役職の幅も広がり、報酬の安定（余程の過失がない限り失業はしない）と仕事のやり甲斐、誇りなどが数値に表れていると思われる。この事が「まあまあ満足している」の数値を高いものにしていると思われる。また「満足していない」が経験年数を重ねることで、低くなっていくことはうれしいことである。

④保護者との人間関係

保護者との人間関係については、「まあまあ満足している」の満足度の割合が経験年数を追うごとに高くなっていた。これは、保護者の気持ちを共有したり、保護者と年齢が近いだけに、喜びも悲しみも分かち合えているということなのではないだろうか。また、保護者も信頼できる保育士と一緒に成長していることが推測される。一方「満足している」を見てみると、経験年数を重ねるごとに満足度の割合が低くなっていた（3年以下24.46%、4～10年3.57%、10年以上16.07%）。

10年以上の保育士は、今までの保育体験とは異なり、人間関係において数多くの保護者や子ども、また訪問者や行政との関わりが多くなる。より幅広い視野でもって自分の成長を見るこ

とができる立場にもあるので、その分自身に厳しい評価をしているのだろうか。「満足している」が低かった理由として、このことが考えられる（これに関連する項目として、⑦保育士としての自分の成長を見てみると、「満足している」が3.76%と低く、とても気にかかった）。3年以下の保育士では「満足している」が24.46%で、「まあまあ満足している」63.15%を合わせると87.61%であった。経験年数の割には満足度が高い。これは、保育所保育指針にもあるように、保護者の支援が園の役割となり、研修（園内外）等で、保護者の保育の指導の重要性をテーマに取り挙げたり（例えば、保護者とのコミュニケーションのとり方など）、保護者の子育て指導については常日頃一人ひとりの保護者と向き合い、トラブル防止に力を注いでいる結果が表われたのではないだろうか。また、他の理由として考えられるのは、経験がある保育士が、保護者の対応を任せないこともあるのではないだろうか。4～10年の保育士では、「満足している」と「まあまあ満足している」を合わせると91.19%で、どの経験年数よりも満足度が高かった。

全体的に保護者との人間関係は満足の傾向であった。しかし自由記述からは、保育士として困っていることとして、保護者対応の難しさなどが述べられており、満足の裏側では心身共に疲れていることがうかがえた。

⑤同僚との人間関係

全体的に高い満足度を示している。経験年数に関係なく、「満足している」と「まあまあ満足している」を合わせると3年以下の保育士93.65%、4～10年の保育士94.89%、10年以上89.9%であった。仲むつまじく仕事をしていることがわかる。「満足している」は、経験年数が上がるとともに割合が低くなっているものの、「まあまあ満足している」は経験年数とともに高くなっている。

⑥上司との人間関係

3年以下の保育士は「満足している」が40.35%であった。「まあまあ満足している」の46.85%を合わせると87.2%であった。経験が浅いだけに、上司が保育士との人間関係を大切にしているという結果であろう。また、4～10年の保育士も「満足している」は35.32%であり、3年以下の保育士に比べると低かったが、「まあまあ満足している」は50.1%と3年以下より高かった。10年以上の保育士は、3年以下と4～10年の保育士に比べて「満足している」割合は低いものの、「まあまあ満足している」割合は3年以下と4～10年の保育士より高かった。

⑦保育士としての自分の成長

他の項目に比べて、満足度が極端に低い。「これで満足してはいけない、もっと専門性を磨き、プロの保育士を目指し、知識や技術を身につけなければいけない」という気持ちの現れではないだろうか。上司からみるば、就労した時からの保育士の成長の進歩が見えるため、確かに成長していることがわかるだろうが、当の本人は「まだまだ自分は…」と思ったり、「これで満足してはいけない」と思うのだろう。4～10年の保育士は、中堅の保育士の立場である。他の保育士の手本として指導的立場になることから、自分の成長を自身で感じるができるのだろうか、他の経験年数より高い割合である。また、10年以上の保育士は、保護者の保育の指導や地域の子育て家庭の支援など、今まで経験のない事業が役割となり、社会の多様なニーズに応えるためにもさらなる専門性や人間性が問われてくる立場となる。したがって、「まだまだ自分は成長していない、もっと自己を磨かなければ」と考え、十分な成長を遂げていることを過大に評価せず謙虚に評価する姿勢がうかがえた。

⑧自分がかかわった子どもに対する保育

一人ひとりの人格や人権を考えると、保育所保育指針では、「子どもの最善の利益」を保障することがうたわれているが、長時間保育の中で、保育士の不規則な勤務体制や多大な仕事量、保護者の価値観の相違と多様な要求への対応や地域の連携などにより、仕事の役割分担はするものの、子どもの数に対して定められた保育士の定数しかいないので、充分子どもに対する保育ができる状況にはない。したがって、このことが自分がかかわった子どもに対する保育の満足度を低くさせていると思われる。各経験年数別に「満足している」と「まあまあ満足している」を合わせた割合を見ると、3年以下の保育士58.44%、4～10年の保育士73.82%、10年以上80.24%と満足度の割合が経験年数を重ねるごとに高くなっている。喜ばしいことである。一方、「満足していない」の割合は3年以下の保育士が3.25%、4～10年が1.64%、10年以上の保育士は0.69%と、経験年数を重ねるごとに低くなっている。保育士は「子どもが好きな人」や「子どもに関心がある人」が、専門的な知識や技術を身につけてきた「専門職」であるのでその誇りが、数値に反映されたと思われる。

表Ⅱ－15 満足度に関して各段階が選択された割合（％）（P.40再掲）

		満足している	まあまあ満足している	あまり満足していない	い満足していない
①現在の勤務体制	3年以下	34.99%	50.76%	12.74%	1.51%
	4～10年	25.61%	53.28%	17.83%	3.28%
	10年以上	20.82%	58.87%	16.38%	3.92%
②現在の仕事内容	3年以下	37.09%	52.93%	9.11%	0.87%
	4～10年	29.92%	56.15%	12.70%	1.23%
	10年以上	27.23%	57.02%	13.70%	2.05%
③現在の仕事に対する報酬（給与）	3年以下	22.46%	40.39%	27.00%	10.15%
	4～10年	16.02%	38.60%	29.77%	15.61%
	10年以上	17.78%	43.38%	25.13%	8.72%
④保護者との人間関係	3年以下	24.46%	63.15%	9.96%	0.43%
	4～10年	23.57%	67.62%	7.79%	1.02%
	10年以上	16.07%	74.36%	8.89%	0.68%
⑤同僚との人間関係	3年以下	49.67%	43.98%	5.03%	1.31%
	4～10年	39.88%	55.01%	3.48%	1.64%
	10年以上	31.51%	58.39%	9.42%	0.68%
⑥上司との人間関係	3年以下	40.35%	46.85%	10.41%	2.39%
	4～10年	35.32%	50.10%	11.50%	3.08%
	10年以上	33.68%	52.41%	11.17%	2.75%
⑦保育士としての自分の成長	3年以下	3.67%	33.91%	53.78%	8.64%
	4～10年	4.71%	44.67%	44.67%	5.94%
	10年以上	3.76%	52.14%	41.37%	2.74%
⑧自分がかかわった子どもに対する保育	3年以下	5.84%	52.60%	38.31%	3.25%
	4～10年	7.77%	66.05%	24.54%	1.64%
	10年以上	6.53%	73.71%	19.07%	0.69%

おわりに

保育士不足に悩む昨今であるが、保育士の資格は持っているものの、就労3年未満の離職者が増加していることや、保護者と保育士のトラブルがもとで、保育士の仕事を断念する人が多い。そのような保育士の離職の理由として、勤務時間が長いことや、保育の諸記録や提出書類の多さも、保育士離れのひとつと考えられる。また、就職する前は人間関係が心配のようであるが、今回のアンケートの結果から、3年以下の保育士が同僚と仲良く仕事をしている様子や、保護者とのコミュニケーションがとれるかどうかについて心配しつつも、先輩に助けられながら育てられている様子がうかがわれた。

そして、経験を重ねるごとに保育所の新たな使命に立ち向かい、努力している姿もうかがわれ、同じ保育の道を歩んでいる者として、うれしく誇りに思った。

V. 小野田晴世研究委員による考察

継続勤務の要件とは

はじめに

昨今の保育士不足のあおりを受けて、我々保育士仲間の集まりでは、決まって「どう？来年度の保育士確保できた？」が挨拶代わりになるほど、保育士の人材不足は深刻になりつつある。つい数年前までは、保育士専門の人材派遣会社から毎日のようにダイレクトメールや営業の電話がかかってきていたのに、ここ2～3年は、それさえもパッタリと来なくなった。それどころか、一昨年、我が園で産休及び育休代替保育士の派遣を、当該職員が産休に入る数か月前から、3社の派遣会社に依頼したが、適当な人材がなかなか見つからず、やっと人材を確保できたのは、当該職員が産休に入ってから1か月が過ぎた頃であった。保育士の離職率の高さは、今に始まったことではないが、ここ2～3年の人材不足は、もはや危機的状況と言っても過言ではないだろう。

保育現場では日々、直接子どもと接する業務のみならず、膨大な量の書類の整理や環境整備、翌日の保育や行事の準備に追われているのが現実である。ここ数年の我が園における離職者の傾向を見てみても、その仕事量の多さに根を上げて、就職してわずか1～2年で退職してしまうケースも少なくない。さらに、養成校の先生の話では、「とりあえず保育士資格を取得した上で、一般企業への就職希望者が増加している」とのことだった。

女性の意識の変化や育児休業法の整備、そして長引く景気の低迷から、働く母親が増加し、保育所利用者のニーズも多様化している。それに伴い、保育サービスも多様化し、その需要は益々高まっている。

保育サービスのメニューをソフトとするなら、そのソフトを動かす肝心のハードはどうなっているのか。保育におけるハードとは、つまり、望ましい保育を展開する上で基本となる人的、物的環境である。果たして、その整備はきちんとできているのであろうか。

保育制度そのものの改革がいよいよ現実味を帯びてきている今、本調査をもって、保育の基本である保育現場の実態を明らかにし、早急に保育の人的環境を整えるべく提言ができれば幸いである。

—継続勤務の希望有無における予測と実際—

表Ⅱ－18 継続勤務の希望（％）（P.43再掲）

	はい	いいえ	回答人数
3年以下	91.5	8.5	434
4～10年	86.2	13.8	442
10年以上	92.1	7.9	531
平均（重みなし）	89.9	10.1	1407

この調査結果全体を通して見て、当初の私の予測に反する数値を示したのが、設問14に対する回答であった。

まず、意外な結果だったのは、問14の「あなたは、今後も保育士として勤務することを考えておられますか？」との設問に、表Ⅱ－18で示したように、実に全体の約9割もの人が「はい」と回答していることだ。私の予測では、「はい」と回答するのは、先述した離職率の高さや深刻化する人材不足から鑑みて、良くて全体の6割～7割ぐらいではないかと考えていたからだ。現役保育士の9割もの人が「この仕事を続けたい」と思っていることに、驚き以上に感動を覚えた。

そして、もう一つ興味深かったのは、「継続勤務を希望する理由」と「継続勤務を希望しない理由」は表裏一体であるだろうと予測していたが、両方の調査結果を見比べてみると、必ずしもそれが一致しなかった。むしろ、その理由の分類そのものに違いが見られたのである。

それでは、これらの内容を詳しく見てみよう。

—継続勤務を希望する理由、希望しない理由についての考察—

表Ⅱ－19－a 継続勤務を希望する理由の平均値が高かった上位5項目

順位	継続勤務を希望する理由	平均割合（％）
1	仕事の内容	66.5
2	職場の人間関係	56.3
3	通勤の便利さ	54.1
4	保育理念・方針	40.2
5	休暇	40.0

※表は筆者作成

- ① まず、表Ⅱ－19（P.43）を元に、継続勤務を希望する理由の平均値が高かった上位5項目をまとめてみると、1位は「仕事の内容」、2位は「職場の人間関係」、3位は「通勤の便利

さ」、4位は「保育理念・方針」、5位は「休暇」であった（表Ⅱ－19－a）。

さらにここで、継続勤務を希望する理由の内容を「仕事内容に関する項目」と「処遇に関する項目」とに分類すると、給与や休暇、労働時間、福利厚生といった、いわゆる「処遇に関する項目」よりも、仕事の内容、職場の人間関係、保育理念・方針等の「仕事に関する項目」の方が圧倒的に高い数値を示していた。したがって、保育士は自己の利益よりも、仕事内容や円滑な人間関係を求め、常により良い保育を目指しているところに、保育士の仕事に対する「誇りと責任感」さらには「職業意識の高さ」を見い出しているといえる。

—継続勤務を希望しない理由についての考察—

表Ⅱ－20－a 継続勤務を希望しない理由の平均値が高かった上位5項目

順位	継続勤務を希望しない理由	平均割合（％）
1	給与	49.6
2	仕事の内容	46.7
3	休暇	40.6
4	職場の人間関係	40.1
5	労働時間	40.0

※表は筆者作成

② 続いて、継続勤務を希望しない理由について、同じく平均値が高かった上位5項目をまとめてみると、1位は「給与」、2位は「仕事の内容」、3位は「休暇」、4位は「職場の人間関係」、5位は「労働時間」であった。

この結果から、継続勤務を希望する理由とは逆に、5項目中で3項目が「処遇に関する項目」であった。このことについて、表Ⅱ－19－aと表Ⅱ－20－aをさらに経験年数別に分けて次の章で詳しく見てみよう。

③ 継続勤務を希望する理由と希望しない理由を詳しく見てみると、「仕事内容」「職場の人間関係」「休暇」の3項目はどちらにも該当していた。また、継続勤務を希望する、しない両方で平均割合が高い数値を示していることから、保育士が勤務の継続を希望する必要最低条件は、①『仕事の内容が自分に合っていること』、②『職場の人間関係が円滑であること』、③『有給休暇が取得しやすい環境が整っていること』であると言って良いだろう。言い換えるならば、人材の確保と保育士の離職率を下げるためには、この3項目の整備が必須なのである。

—経験年数別に見る各項目についての考察—

表Ⅱ－22－a 経験年数3年以下における継続勤務を希望する理由と希望しない理由として選ばれた上位5項目の割合（％）

	継続勤務を希望する理由とその割合		継続勤務を希望しない理由とその割合	
1	仕事の内容	66.5	給与	54.1
2	通勤の便利さ	57.7	仕事の内容	45.9
3	職場の人間関係	57.2	職場の人間関係	45.9
4	労働時間	42.6	休暇	37.8
5	保育の理念・方針	41.3	労働時間、人材育成の雰囲気	35.1

※表は筆者作成

表Ⅱ－22－b 経験年数4～10年における継続勤務を希望する理由と希望しない理由として選ばれた上位5項目の割合（％）

	継続勤務を希望する理由とその割合		継続勤務を希望しない理由とその割合	
1	仕事の内容	64.6	給与	59.0
2	職場の人間関係	55.1	労働時間	44.3
3	通勤の便利さ	52.0	人材育成の雰囲気	42.6
4	休暇	38.3	休暇	41.0
5	保育の理念・方針	36.5	職場の人間関係	41.0

※表は筆者作成

表Ⅱ－22－c 経験年数10年以上における継続勤務を希望する理由と希望しない理由として選ばれた上位5項目の割合（％）

	継続勤務を希望する理由とその割合		継続勤務を希望しない理由とその割合	
1	仕事の内容	68.3	仕事の内容	54.8
2	職場の人間関係	56.6	休暇	42.9
3	通勤の便利さ	52.6	労働時間	40.5
4	保育の理念・方針	42.7	給与、人材育成の雰囲気	35.7
5	休暇	40.7	職場の人間関係	33.3

※表は筆者作成

- ①上記に示した表においても、継続勤務を希望する理由として一番高い数値を示しているのが「仕事内容」であった。その数値は、経験年数10年以上で68.3％と非常に高く、他の経験年数の数値と比較しても、著しい差異は見られなかった。したがって、保育士が勤務を継続する上で、「仕事内容」が最も重要な事項であることがわかる。しかし、「仕事内容」と一言で

言っても、保育士の仕事内容は非常に複雑で多岐にわたることは先述したとおりである。ここで言う「仕事内容」とは、子どもと関わる事そのもののなのか、それによって得られる子どもの笑顔や成長を見られる喜びなのか、それとも製作や室内装飾が楽しいのか、回答者の価値観によってとらえていることが大きく異なっていると思われる。表Ⅱ-17 (P.42) を見てみると、どの経験年数においても、子どもと過ごす時間楽しさをとても感じている割合が非常に高いことから、ここで言う「仕事内容」とは子どもと過ごす時間であると推測することができる。

したがって、『子どもと過ごす時間の楽しさが、保育士が勤務を継続したいと思える原動力』となっていると言えよう。

②次に、継続勤務を希望しない理由を見てみると、継続勤務を希望する理由の中では上位5項目に入らなかった「給与」が最も高い数値を示していたのが、特に経験年数4～10年であった。経験年数4～10年と経験年数10年以上の割合の差を見ると、23.3ポイントもの差があることがわかる(表Ⅱ-22-b、表Ⅱ-22-c)。そして興味深いことに、継続勤務を希望する理由で最も割合が高かった「仕事の内容」が、継続勤務を希望しない理由では経験年数4～10年で39.3%であり、12項目中6番目であった。一方、経験年数10年以上では「仕事内容」は54.8%であり、経験年数4～10年と比較すると15.5ポイントもの差が見られたのである(P.42 表Ⅱ-20)。したがってこれらのことを、もう少し詳しく考察してみようと思う。

③経験年数4～10年の勤務の継続を希望しない理由で、給与や労働時間といった「処遇に関する事項」が高い割合を占めた理由を考えてみると、あくまでも推測の域を出ないが、以下のような事が考えられるのではないだろうか。まず、この経験年数からすると年齢的には概ね25歳～30歳ぐらいであろう。であるならば、ある程度、仕事内容を把握し、職場の人間関係も築き上げ、プライベートに目を向ける余裕が出て来る時期なのではないだろうか。友達と遊んだり、趣味や習い事等にかかる時間的余裕が欲しいし、また、友達との交際費、趣味や自分磨きにかかる金銭的な余裕も欲しい、結婚や将来を見据えて貯蓄を考え出すのもこの時期であろう。いずれにしても、プライベートの充実期である故、仕事内容に関する項目よりも給与や労働時間の保障といった処遇面に関わる項目がより多く選ばれたのではないだろうか。

④今度は逆に、継続勤務を希望しない理由で「仕事内容」に関する項目の割合が高かった経験年数10年以上について考えてみる。先述のように、一言で仕事の内容と言っても、その解釈は、それぞれの価値観によって様々であるが、この場合の仕事の内容は肯定的な内容として

解釈されたものではないことは確かであろう。経験年数が多い保育士が仕事の内容を理由に辞めたいとする場合、体力的な不安に加え、仕事への行き詰まりやバーンアウト症候群（燃え尽き症候群）のような精神的不安やストレスがより強くなっていると考えられるのではないだろうか。

実際に、表Ⅱ－17（P.42）を見ても、仕事における肉体的、精神的なきつさをとても感じていると回答している割合が高いことがわかる。

一般的に、教師や福祉職、看護師等の対人支援に関わる人にバーンアウト症候群の罹患率が高いと言われている。保育士も例外ではない。実際に、保育士におけるストレス、バーンアウトの調査研究や保育士のバーンアウト防止を呼び掛けるガイドブックも（福村出版「保育者のストレス軽減とバーンアウト防止のためのガイドブック」ジェフ・A・ジョンソン／著 尾木まり／監訳）出版されている。

2011年に愛知淑徳大学大学院が愛知県内の3,056名の保育士を対象に行った調査結果（「保育所に勤務する保育士のバーンアウトに影響を及ぼす要因の検討」2011）によると、その主な要因は「仕事の量的負荷」と仕事の評価、処遇、組織方針などの「職務条件の悩み」であることがわかった。特に経験年数が多い保育士は「仕事の量的負荷」を感じている数値が高かった。C. 調査結果の分析の表Ⅱ－11～13（P.35～38）の結果を見ても、経験年数が少ない保育士より経験年数が多い保育士の方が、仕事内容が多岐にわたり、またその量も多いことが明らかである。経験年数の多い保育士が、継続勤務を希望しない理由として、仕事の内容と休暇の2項目の割合が高かったことから、継続勤務を希望しない理由とバーンアウトの起因に少なからず何らかの関係性があるのではないだろうか。

まとめと今後の課題

今回の調査研究により、保育士が継続して勤務を希望する条件は①『仕事の内容が自分に合っていること』、②『職場の人間関係が円滑であること』、③『有給休暇が取得しやすい環境が整っていること』であることがわかった。中でも、仕事の内容は最も重要で、継続勤務を希望する、希望しない、どちらの判断基準にもなり得るのである。

そして、保育士は、日々仕事上で精神的、肉体的なきつさを感じながらも、子どもと過ごす時間の楽しさに支えられて、その職務を遂行しているという実態が、この調査から見えてきた。全体の約7割の保育士が感じている子どもと過ごす時間の楽しさは、いわば普遍的であり、保育士という職業を選択した時から必然的に享受することができるものだ。

であるならば、保育士が日頃、仕事上で感じている精神的、肉体的きつさの内容をさらに具体的にし、それらを一つ一つ精査し、整備すれば現在のような慢性的な人材不足や離職率の高さを少なからず解消できるのではないだろうか。

今、保育制度は過渡期を迎えようとしている。しかし、現場における保育士の職場環境の整備なくしての保育制度改革の推進は憂慮すべきであろう。今こそ、まずは現場における保育士の業務実態と職場環境に目を向け、新しい制度を取り入れるべく土壌の構築を図る事こそが保育制度改革を推進する上での最重要課題と言えよう。

今回の保育士の実態に関する調査で、保育士の業務は煩雑で膨大であるという実態が明らかになった。この調査が、保育士の職場環境の整備に一石を投じるきっかけとなることを願ってやまない。

VI. 田中浩二研究委員による考察

保育士として働く上での困ったことや保育士として良かったこと ―自由記述より―

ここでは、本調査個票Bで自由記述として尋ねた設問12「保育士として働いていて困っていることは何ですか」および設問13「あなたは保育士になって良かったことは何ですか」の2項目について記述の傾向を整理し考察を行う。

1 設問12について

1―1 自由記述の傾向

「保育士として働いていて困っていることは何ですか」の問いに対して、経験年数3年以下の保育士からは318件、経験年数4年以上10年未満の保育士からは350件、経験年数10年以上の保育士からは399件の自由記述があった。さらに、自由記述の内容を整理するために、記述されている内容およびキーワードを基に、困っている事柄を①「体力・精神力の負担、体調の管理・不安」、②「責任の重さ」、③「仕事量が多い」、④「職場の人間関係・連携」、⑤「給与の低さ」、⑥「保護者との関係」、⑦「子どもの対応・関わり方」、⑧「家庭やプライベートの両立」、⑨「休みが取れない、自由時間がない」、⑩「自分自身の保育や仕事に対する知識・技術等の不安・課題」、⑪「職員の不足」、⑫「その他」に分類した。

各経験年数での記述の頻度は表1のようになった。

表1 設問12の記述内容

項 目	3年以下	4～10年	10年以上
体力・精神力の負担、体調の管理・不安	34	54	79
責任の重さ	4	6	7
仕事量が多い	90	120	137
職場の人間関係・連携	50	59	88
給与の低さ	25	28	12
保護者との関係	82	105	128
子どもの対応・関わり方	56	22	13
家庭やプライベートの両立	12	47	63
休みが取れない、自由時間がない	35	38	50
自分自身の保育や仕事に対する知識・技術等の不安・課題	84	35	26
職員の不足	10	15	20
その他	52	85	82
計	534	614	705

※表は筆者作成

経験年数3年以下では計534件、4年から10年では614件、10年以上では705件の記述内容が得られた。経験年数3年以下で困っている事柄として最も多かったのは「仕事量が多い」で、次いで「自分自身の保育や仕事に対する知識・技術等の不安・課題」、「保護者との関係」となった。4年から10年では、「仕事量が多い」が最も高く、次いで「保護者との関係」、「その他」であった。経験年数10年以上では、「仕事量が多い」で最も困っている事柄となり、次いで「保護者との関係」、「職場の人間関係」、「その他」が多かった。

経験年数での比較では、「体力・精神力の負担、体調の管理・不安」や「職場の人間関係」、「保護者との関係」、「家庭やプライベートの両立」、「職員の不足」などの項目で、経験年数が上がるにつれて増加する傾向が見られた。一方、「子どもの対応・関わり方」や「自分自身の保育や仕事に対する知識・技術等の不安・課題」で経験年数が上がるにつれて減少する傾向が見られた。

1—2 自由記述の内容

上記の記述内容の分類に従って、経験年数ごとの具体的な記述内容を見てみる。

①「体力・精神力の負担、体調管理・不安」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・十分な睡眠がとれないこと
- ・体力面や精神面で辛さを感じる
- ・からだ（腰痛）に不安を感じるようになってきた
- ・子どもを抱くことが多く、腰痛がひどいことがある
- ・体調管理が難しい（子どもの流行症状がうつる）
- ・声の出し過ぎで週末に声がかれてしまうことが多くなった
- ・膝などが悪くなってしまうこと
- ・行事が忙しい時は体力的にきつい
- ・風邪や病気にかかりやすくなった
- ・肉体的・精神的に負担がかかる
- ・体力的にハードで疲れた状態が抜けないまま働くことが多い

《経験年数4年以上10年未満》

- ・長時間、子どもを抱いて動く事が多く、腰などが痛くなる
- ・体調の悪い時もあまり簡単に休めず、肉体的にきついとすることがある
- ・年々、体力的にきつくなっている（腰痛などを含め）
- ・体調を崩しやすくなってしまった

- ・喉が元々あまり強くないので、痛めて声が全くでなくなる。
- ・職業病の特に小さな子どもをあつかうクラスだと抱っこやおんぶの頻度が多く、首や肩に負担がかかり時々具合が悪くなる面
- ・腰痛が慢性的になり辛い
- ・精神的プレッシャーを感じる
- ・自分の体力がおいつかない事
- ・腰痛や体の不調があり、疲れてしまう

《経験年数10年以上》

- ・身体をこわした
- ・年齢を感じ、身体がきついことがある（腰痛等）
- ・心身共に疲れている
- ・風邪や感染症等が流行すると自分までうつってしまう
- ・手首や足腰に痛みが出て来ている
- ・最年長のクラスを受け持った時に精神的に追い込まれた
- ・年齢とともに体力の低下（疲れがとれない）
- ・自身の年齢と仕事のきつさのギャップ（思うように身体がついていかなくなってきているのを感じる）
- ・仕事量に対して体力がついていけない

経験年数に関わらず、身体的精神的な負担を感じている。身体的には、疲れが取れない、膝・腰・首の慢性的な痛み、声の枯れに関する記述が多い。また経験年数が増えるほど、年齢的な疲労の訴えも目立つようになっており、保育業務に対する身体的な負担の大きさが伺える。

②「責任の重さ」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・責任の重大さ、事務書類の多さ等で、精神的に時間的に余裕のもてなくなる時がある
- ・2年目の負担が大きい
- ・子どもにとっては保育園ですごく時間が長いので、様々な面で責任が重いと感じる

《経験年数4年以上10年未満》

- ・臨時職員に求められている責任が重すぎる
- ・主任など会議で留守にすることが多く、何かあった時の責任など不安がある
- ・命を預かる責任の重さにつぶされそうになることがあります
- ・長年いると頼られてしまうことが多く、荷が重い時がある

《経験年数10年以上》

- ・年齢を重ねるにつれて、責任のある仕事が多くなり、精神的にしんどい
- ・責任の重圧を乗り越えてやり抜く、精神的強さを持ち合わせる事

「責任の重さ」に関する記述から、具体的には、子どもの命や将来を担っていることへの責任を感じている。なおかつ、経験年数が増えるにつれて、職場内での責任が増加し負担を感じている姿が見てとれる。

③「仕事量が多い」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・行事の前など仕事が多くて、残業しないと終わらないこと（ほぼ毎日サービス残業なこと）
- ・製作の準備や装飾など帰宅後やらなければならない仕事も多いということ
- ・決められた時間に仕事が終わらない
- ・残業や持ち帰りの仕事が多く、趣味にとれる時間がない
- ・帰宅しても次の日の準備などでゆっくりと休めない

《経験年数4年以上10年未満》

- ・書類（月案、週案、日誌案等）が細く時間がかかる、持ち帰りが多い
- ・家庭に持って帰ってくる仕事が多く、休日も何かしらやることが多い
- ・書き物が大変、負担すぎ
- ・事務仕事をする時間のやりくりが困難（持ち帰ってしまう）
- ・書類が多く、勤務時間内にはなかなかできない

《経験年数10年以上》

- ・事務量がとても多い
- ・事務仕事の量が多いにも関わらず職場では出来ないのだから家に持ち込むこと
- ・休みの日も持ち帰りの仕事をしなければならないこと
- ・勤務時間内に仕事が終わることができない
- ・家に持ち帰ってする仕事が多く、家事との両立が難しく（忙しすぎる）なる

すべての経験年数において最も記述の多い「仕事量が多い」についてでは、経験年数の区別なく、多くの回答が書類や事務仕事に関連する内容であった。日中は子どもに向き合って保育をしているため、指導計画等の書類の作成、翌日の保育準備などは勤務時間内には行うことができず、結果的に自宅へ持って帰っている。そのことが仕事とプライベートの区別がつかないといったことにつながっている様子が見て取れる。また、経験年数が高いほど、事務量が増え

ている様子も伺えた。

④「職場の人間関係・連携」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・複数担任の連携の難しさ
- ・職員間や保護者との人間関係を築くことで悩みが付きにくい
- ・女性の職場であるということ
- ・上司や同僚に相談できない自分
- ・上司との人間関係

《経験年数4年以上10年未満》

- ・自分の保育感と違う思いを持っている保育士への接し方
- ・保育理念が他の保育士の方たちと考えがあわない
- ・上司との関係
- ・同僚との人間関係
- ・連絡・報告などの全体把握についてうまくいかないこと
- ・自分の思いが伝えられない事がある（他の保育士に対して）

《経験年数10年以上》

- ・若い保育士を育てるのが難しい
- ・他の職員との意識の違いなどがある
- ・上司からの信頼を感じない時がある
- ・職員同士の意識の違い、方向性の違いなど
- ・若い人を扱う難しさ
- ・後輩保育士への接し方
- ・先輩に教えてもらった経験が少ない中での後輩指導
- ・後輩保育士に対する指導などが十分できない

「職場の人間関係・連携」に関する記述では、経験年数の浅い保育士では「同僚・先輩、上司との関わりの難しさ」や「自分自身の職場への適応」などに困ったと感じている。一方、経験年数が上がると、「後輩、上司との関わりの難しさ」といった中間の立場での人間関係や連携の難しさを感じるとともに、「後輩の育成」に対しての困難を感じている姿が見られた。

⑤ 「給与の低い」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・短大時代奨学金を借りていたので今の給与では生活がきつい
- ・責任が伴う半面給料が低い
- ・仕事内容に対する給与の低さ
- ・労働時間が長い割に給料が安い
- ・仕事量が多く、ハードな仕事の割りに給料が安い

《経験年数4年以上10年未満》

- ・仕事量と給与が合わない
- ・経済的な面、仕事内容に対しての給料に不満を感じている
- ・仕事量と給与が割りに合っていない、サービス残業が多すぎる
- ・給与と労働が見合わずにいたので、時折精神的にかなり疲れる

《経験年数10年以上》

- ・給料や手当が安いこと
- ・仕事には満足しているが経済的な面で続けるか迷っている
- ・給与が上がっていない

「給与の低さ」については、経験年数が上がると記述は減っている傾向にあるが、仕事量や仕事内容、労働時間とのバランスが取れていないといった意見が多く見られる。また、前述のとおり、仕事を持ち帰ることが多い状況にある中での給与の低さを感じている保育士が多いことも伺えた。

⑥ 「保護者との関係」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・保護者への対応、クレームなど困る
- ・保護者との信頼関係
- ・子育て支援センターに相談にきて頂いた保護者にうまく対応できているか
- ・保護者との子どもに対する認識の差
- ・保護者に対する対応の難しさ
- ・保護者とのコミュニケーションが難しい

《経験年数4年以上10年未満》

- ・母親の悩みや不安に適切に答えられているかどうか
- ・保護者からクレームなどはないが信頼や深いつながりは築けていない気がする

- ・保護者のニーズにこたえられない時
- ・保護者の要求ばかりが目立ち、保育士の話を受け入れない保護者もいる
- ・最近の保護者の意識の差
- ・保護者との関わり、対応の仕方

《経験年数10年以上》

- ・意志の疎通が難しい保護者が増えてきている
- ・最近の保護者の意識の違い、アドバイスのしかたが難しくなっている
- ・保護者への対応の難しさ
- ・保護者に伝えたいことをうまく伝えられない時がある
- ・保護者の方と子どものことについて話す時間がない
- ・保護者とのコミュニケーション
- ・病気や怪我をした時の保護者への対応
- ・クレームを言うてくる保護者への対応

「保護者との関わり」については、全体的に困難と感じている大きな事柄の1つであり、各経験年数で記述が多い。記述の傾向としては、第1に保育者自身のコミュニケーション能力・技術に疑問や不安を抱えている内容、第2に意識の共有に関する内容、第3にいわゆるクレームやモンスターペアレントと感じる保護者への対応での苦慮、などである。経験年数が浅い保育士はコミュニケーション能力の疑問や不安に関する記述が多く、経験年数が上がると、保護者との意識の共有に困難さを感じている記述が多い。また、経験年数10年以上では、クレーム対応やケガ等の連絡に際しての保護者との関わり方に苦慮している様子が伺える。

⑦「子どもの対応、関わり方」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・子どもとの関わり方がこの時は本当にこれでいいのかと、不安になる時がある
- ・子どもをまとめることができない
- ・個々の子どもへの発達に応じた援助の難しさ
- ・子どもの気持ちをうまく汲みとってあげられないこと

《経験年数4年以上10年未満》

- ・集団をまとめきれない時
- ・予想と違った行動を子どもがした時に、うまく対応できないことがある
- ・1人ひとりとの関わり、援助が十分にできないこと
- ・子ども間のトラブルに対しての声かけ

《経験年数10年以上》

- ・ケガが心配で思いきり保育できなかったり心配しすぎてしまう
- ・個別で対応しなければいけない子が多すぎる
- ・1人1人の子どもとじっくりかかわれない
- ・基本的生活習慣の乱れに対しての対応

「子どもの対応、関わり方」では、経験年数が低い保育士では、自分自身の子どもへの関わり方を模索している様子、自信を持てきれていない様子が伺える。経験年数が上がると、個別の対応の難しさや安全を配慮した上での関わりの難しさといったことに苦慮している記述が多く見られる。

⑧「家庭やプライベートとの両立」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・いつどこで保護者と子どもに会うかわからないから気が抜けないこと
- ・将来結婚して家庭を持った時、仕事と家庭の両立ができるのか不安に思う
- ・仕事の時以外でも「保育所の先生だから」と子守りを任せられそうになる

《経験年数4年以上10年未満》

- ・家庭もあるので両立が難しい
- ・休日も仕事のことを考えたり、持ち込んだりしてしまう
- ・プライベートでも、周囲からは「先生」という目で見られるので、行動を控えたり、ストレスに感じることもある
- ・家庭のことより園の仕事が中心にならざるをえないこと
- ・持ち帰りの仕事が多く、プライベートの時間が減ってしまう

《経験年数10年以上》

- ・家庭との両立が難しい
- ・プライベートでも外で会ったら“先生”でいなければならないこと
- ・休みの日も日ごとの事を考えたり仕事をしてしまう
- ・私生活と仕事の差があまりない
- ・仕事を優先にしないではいけない
- ・自分の子どもの行事に参加できない

「家庭とプライベートの両立」に関しては、経験年数によらず常に「保育士」でいなければならないことを感じている。また、持ち帰りの仕事が多いことが原因で、仕事とプライベート

を両立することが困難であるとの記述が多く見られた。さらに、経験年数10年以上では家庭や家事との両立に困難を抱えている様子が伺える。

⑨「休みが取れない・自分の自由な時間がない」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・自分の時間がない
- ・長期休暇がとれない
- ・有給休暇を消化できない

《経験年数4年以上10年未満》

- ・有給がなかなか取れない
- ・思うように休暇が取れない
- ・休みの日も素材集めや教材研究にあてるしかない
- ・必要な時には休みの時にも出てきて、仕事をしなければならない時がある

《経験年数10年以上》

- ・思うようにリフレッシュ出来る有給休暇がとれない（子どもの病気以外で）
- ・休暇を取るのに保育園の行事中心となり取りづらい
- ・土曜日の休みが月に一度しかとれないこと
- ・自分の子どもが病気の時や行事参加での休みがとれない
- ・自分の子どもの保育園が台風で休園になるのに、出勤しないといけない
- ・子どもから離れた休憩がとれない
- ・責任のある仕事である為、自分の子ども達の学校行事などの参加が難しい

「休みが取れない・自分の自由な時間がない」については、保育士という職種の労働条件における重要な課題と言える。各経験年数ともに有給休暇や病気等で必要な時に休暇を取ることができない現状が伺える。既婚の保育士にとっては家庭との両立が困難になる原因の一つとも考えられ、職員体制の確保も含めて休暇を取りやすい環境を整備する必要性が示唆された。

⑩「自分自身の保育や仕事の知識・技術等の不安・課題」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・手遊びや遊びのバリエーションが少ない事
- ・歌、ピアノなど苦手なこと
- ・パソコンの業務があまり得意ではないこと
- ・大学で学んできたことと、現実に出来ていることのギャップに悩んでいる

- ・自分の保育に自信が持てず、常に後悔してばかりいること
- ・自分の知識・経験不足
- ・母親（育児）の経験がないこと
- ・叱り方、伝え方が難しいなと思うことがある
- ・指導計画の立案、指導方法

《経験年数4年以上10年未満》

- ・自分の経験不足
- ・ピアノ演奏のレベルアップの為、練習は続けているが限界を感じることもある
- ・病気やけがの対応に力不足を感じる
- ・自分が保育士として適正があるかどうか
- ・自分の保育の引き出しの少なさ
- ・ノートを書く時キレイな字でかけない

《経験年数10年以上》

- ・自分の子育て経験がないため、保護者への説得力がない
- ・たくさんの知識や専門的な目標が日々新しくなったり、増えていったりするので、学んでいかなければならないことが多い
- ・パソコンが主流になってきている中、使いこなせない
- ・保育を理論で裏付けして立証していくことが苦手であること
- ・自分自身の力量のなさに自信をなくす
- ・もっといろんな事ができるようになりたい

「自分自身の保育や仕事の知識・技術等の不安・課題」では、経験年数の浅い保育士ほど多くの困難を抱えている。内容としては、手遊びや歌遊び、活動のレパートリーの少なさや、ピアノ等の技術の低さ、また子どもや保護者への関わり方の未熟さなどを感じている。しかし、経験年数が多い保育士においても手遊び等のレパートリーを増やしたい、ピアノを上手に弾くことができるようになりたい、といった意見も見られ、自分自身の知識や技術の不安や課題はいつまでも持ちつづける様子が伺え、このことが保育士自身の質の向上につながっているとも捉えられる。また、近年ではお便りや指導計画の作成等でパソコンでの作業が求められることが多く、パソコンを始めとした機器の操作を習得することの大切さも示唆された。

⑪「職員の不足」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・職員数も少なく、職員一人ひとりの負担が大きい

- ・職員の人数がギリギリな為、降園ラッシュと重なると、退勤時間になっても帰れない
- ・正職が少なく、休み（特休）利用をするとき、少し躊躇すること

《経験年数4年以上10年未満》

- ・子どもに対しての保育士の人数
- ・人数（職員）がギリギリのため、事前に態勢をとっても当日職員が休むと大変
- ・クラスに正規職員が一人しかいないので、月案、チェック表などを全てやらなくてはならず追われている
- ・職員の数が子どもの人数に対して少なく、ゆったりした保育ができない
- ・人員不足のため、個別に支援が必要な子へ行きとどかない、他の子をしっかり見てあげられない時もある

《経験年数10年以上》

- ・人員不足による保育と事務の負担
- ・人員配置が厳しく職員が大変な思いで働いている
- ・行事や土曜出勤がある中で、子どもの登園人数も多いので、振替代休や有給のやりくりが毎日誰かが1名休む事になるなど、難しいが何かとやりくりしている
- ・保育士が少ない為、有給休暇が思うようにとれない
- ・保育士の人数が少なく、必要な保育ができていない
- ・代替保育士がなかなか見つからないこと
- ・職員30人に対して、正規職員が3人と極端に少ない

「職員の不足」については、児童福祉施設最低基準を満たしている現状においても、仕事量に対して適正でない、休暇等を取るためには不十分であるという現状が伺える内容であった。経験年数が高い保育士では、保育所全体の運営上の観点から職員不足の困難を感じている傾向が見られた。

⑫「その他」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・障害児に対する保育のあり方
- ・将来性
- ・一般の人の保育に対する、理解・知識・関心の低さ

《経験年数4年以上10年未満》

- ・正職と非正規職員の差
- ・男性が少ないところ

- ・手のかかる子どもが増えていて対応に困るときがある
- ・気になる子への対応
- ・子ども達がのびのびと過ごせる環境を中々つukれない
- ・保育所の設備の悪さ（ひび割れ、トイレが少ない、水道が少ない、保育室が狭いなど）
- ・社会から見た保育士の地位
- ・子どもの園制度の複雑さがいつまでたっても解決していかない
- ・新システム計画など将来への不安
- ・外国人家族への対応

《経験年数10年以上》

- ・職員の雇用形態が違ふ為、職場内で格差を感じ非常に働きにくい
- ・専門職としての資格の意味が国の方でなくしてきている。
- ・世間の保育士に対しての評価の低さ
- ・障害児が増えてきているのに対し、環境（人的も含む）が整っていない
- ・保育環境の悪さ、外で子どもが元気に遊んだり、声を出せない環境（周りからの苦情）
- ・理想と現実とのギャップを感じる
- ・現代社会のニーズと本来子どもに必要なこととのギャップ
- ・保育内容について、行政などから規制が大きくなっているように感じられること
- ・幼保一体施設の国の基準が未完成、未定

「その他」については、各経験年数でさまざまな記述が見られた。比較的多かったものとしては、「障害児、気になる子どもへの対応」や「保育士の社会的地位や認知の低さ」、「保育制度の将来」などが挙げられた。

保育士として働いている中で困っている事柄は、経験年数の違いや地域、職場環境などによって様々である。困難の要因は、個別的な要素に起因するものもあれば、制度上の要因であるものなど様々である。そしてこれらの困難は自由記述の内容にも反映されているように複合的に絡み合っていることが分かる。例えば、書類等の業務が煩雑になることが仕事量の増加につながり、仕事量の増加が休暇や自由な時間の減少につながる。さらに、休暇や自由な時間の減少が体力の負担や不安を招いているという悪循環が発生している。どこか一つを解決すればすべてが解決するということは考え難いが、保育士の自己解決能力の向上も含めて、現在、保育士が抱えている様々な困難を解消する手立てを構築する必要がある。子どもに対する直接処遇者である保育者が安心・安定して働けることが、子どもの安心・安定、さらには保護者の安心・安定につながると考えられる。

2 設問13について

2—1 自由記述の傾向

「保育士になって良かったことはなんですか」の問いに対して、経験年数3年以下の保育士からは371件、経験年数4年以上10年未満の保育士からは410件、経験年数10年以上の保育士からは444件の自由記述があった。さらに、自由記述の内容を整理するために、記述されている内容およびキーワードを基に、「良かった」事柄を①「やりがいを感じる」、②「子どもの成長を見ること・感じることができる」、③「子どもの笑顔や楽しい姿を見ることができる」、④「子どもとの関係」、⑤「子どもと関わるのが楽しい」、⑥「自分自身が笑顔、元気になる、癒される」、⑦「自分の育児の参考になる」、⑧「保護者の感謝・信頼・関係構築・共有」、⑨「自分が成長する・した」、⑩「自分自身の保育の結果・達成感を感じる」、⑪「充実した日々を過ごすことができる」、⑫「いろいろな人との関わり」、⑬「その他」に分類した。

各経験年数での記述の頻度は表2のようになった。

表2 設問13の記述内容

項 目	3年以下	4～10年	10年以上
やりがいを感じる	39	52	58
子どもの成長を見ること・感じることができる	242	245	213
子どもの笑顔や楽しい姿を見ることができる	67	42	40
子どもとの関係	57	36	41
子どもと関わるのが楽しい・嬉しい	97	112	117
自分自身が笑顔・元気になる・癒される	33	59	57
自分の育児の参考になる	22	27	22
保護者の感謝・信頼・関係構築・共有	45	60	71
自分が成長する・した	92	89	78
自分自身の保育の結果・達成感を感じる	25	42	49
充実した日々を過ごすことができる	10	21	21
いろいろな人との関わり	18	30	46
その他	46	62	97
計	793	877	910

※表は筆者作成

経験年数3年以下では計793件、4年から10年では877件、10年以上では910件の記述内容が得られた。全体を通して「良かった」と感じる事柄は「子どもの成長を見ること・感じることができる」が最も多く、すべての経験年数において最多であった。「やりがいを感じる」や「保護者の感謝・信頼・関係構築・共有」、「自分自身の保育の結果・達成感を感じる」、「いろいろな人との関わり」で経験年数が上がるほど増加し、一方で「子どもの笑顔や楽しい姿を見ることができる」や「自分が成長する・した」では経験年数が浅い方が高くなり、経験年数による

喜びの内容の違いが見られた。

2—2 自由記述の内容

上記の記述内容の分類に従って、経験年数ごとの具体的な記述内容を見てみる。

①「やりがいを感じる」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・ やりがいがある
- ・ 子どもの人格形成にかかわる大事な仕事に携わっているということでやり甲斐がある
- ・ 大変な仕事であり、やりがいのある仕事
- ・ 行事などで子どもと一緒にやりがいを感じられること
- ・ 毎日の仕事の中で、やりがいを感じる

《経験年数4年以上10年未満》

- ・ 子ども達の成長していく姿を見られ、やりがいを感じて仕事ができること
- ・ 子どもに関わった分、子どもの成長が見られたり、自分のことを頼りにしてくれるのでやりがいがある
- ・ とてもやりがいのある仕事
- ・ どの仕事よりもやりがいがあり、毎年、感動する、嬉しい出来事を感じられる。

《経験年数10年以上》

- ・ 毎日に変化あり他の仕事では味わえない、やりがいのある仕事と思う
- ・ 専門職として奥が深く、“おもしろい”“やりがい”があること
- ・ 仕事は大変だが、子どもの成長を感じることで、やりがいはある
- ・ 子ども、保護者他との関わりで保育のやりがいを毎日感じていられること
- ・ 生涯やりがいを持ち、仕事を続けられる事
- ・ 子どもが好きでやりがいがある

「やりがい」を感じる要因は種々あるが、総じて様々な場面で保育士の仕事の「やりがい」を感じている様子が伺える。特に、子どもが好きであることや、自分自身が関わった子どもの成長を目の当たりにすることでのやりがい、子どもとともに歩いていくことでのやりがいを感じており、保育士の仕事をしている、あるいは続けている大きな動機の一つとなっている。

②「子どもの成長を見ること・感じることができる」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・子どもの成長を見るのが楽しい
- ・子どもの成長を一番近くで感じられること
- ・子ども達の成長を保護者の方と感じられること
- ・たくさんの子どもの笑顔・成長を感じられること
- ・子ども一人ひとりの小さな成長をも感じられること

《経験年数4年以上10年未満》

- ・継続した成長を感じる事ができる
- ・子ども一人ひとりの成長を感じられる
- ・「昨日でできなかったことが今日できた」など成長を日に日に感じられること
- ・子どもの成長ぶりが1年間を通してみられること
- ・子どもの成長を身近で見ることで感動が味わえる

《経験年数10年以上》

- ・子どもの成長を共に喜び合える
- ・未来の子どもたちが日々成長する姿を目の前で見られること
- ・成長した姿を見られ幸せを感じる
- ・子どもの成長が楽しみです
- ・子どもの成長にふれた時にやりがいを感じる
- ・昨日出来なかった事が、今日できるようになったりなど成長を近くでみることができる
- ・子どもの成長が感じられ、感動することが多々ある
- ・子どもが立ち上がったたり、歩けるようになったりする成長が見えた時

経験年数を問わず、間近に子どもの成長を感じることができ、なおかつ、自分自身が子どもの成長に携わっていることに喜びを感じている様子が伺える。記述の内容が最も多かったことから分かるように、このことが保育士として働くことの喜びであると同時にやりがいや達成感にもつながっていると言える。また、子どもの成長の捉え方は短期的なものから数年に渡る長期的なものまで含んでおり、保育士が多様な視点を有していることが見てとれる。

③「子どもの笑顔や楽しい姿を見ることができる」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・かわいい笑顔が毎日見れる事
- ・子どもたちが園生活を楽しんでくれていること

- ・子どもの笑顔や喜ぶ姿を見て共感することができる
- ・子どもたちの笑顔に囲まれている

《経験年数4年以上10年未満》

- ・子どもの笑顔に出会えること
- ・子ども達の無邪気な笑顔を見えること
- ・子どもの笑顔がいつも見れる

《経験年数10年以上》

- ・子ども達と共にいろいろな体験をする事ができ笑顔が見られた時
- ・こどもの笑顔、笑い声で嬉しくなる
- ・子どもの笑顔がいつも自分のすぐそばにあること
- ・子ども達の笑顔や目の輝きに接する時
- ・毎日の子どもの笑顔と保護者の顔を身近で感じることができる

「子どもの笑顔や楽しい姿を見ることができる」では、経験年数が浅い保育士に多く記述が見られた項目である。子どもが好きで保育の仕事を選んだ保育士にとって比較的喜びを実感しやすい事柄であるとも言える。もちろん、経験年数が増えても、このことを喜びと感じる保育士も多くいることが見てとれる。

④「子どもとの関係」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・子ども達から“せんせい”と呼んでもらい、頼りにしてくれている
- ・子ども達が親しんでくれたこと
- ・大好きな子ども達に先生と名前を呼ばれながらかけ寄ってきてくれた
- ・子ども達が「せんせ〜い」と寄ってきてくれること
- ・子どもたちが寄ってきて一緒に遊ぼうとしてくれること

《経験年数4年以上10年未満》

- ・「先生大好き」と言ってくれ信頼関係が築けた時
- ・子ども達が嬉しい時、悲しい時などそばに来てくれること
- ・今まで自分のことをなかなか受け入れてくれなかった子が、笑顔を見せてくれたり、話をしてくれたり、受け入れてくれるようになった時
- ・子どもが自分をたよってきてくれること
- ・慕って近づいてきてくれること
- ・子ども達から先生と親しまれて甘えてきてくれること

《経験年数10年以上》

- ・子ども達や保護者に「先生」と慕われる事
- ・慣れない（保育園に）子が少しずつ園生活に慣れ、手を出すと自ら保育士の所へ来てくれた時
- ・子どもたちとの一体感
- ・子どもが保育園が好きと言ってくれた時
- ・子どもが自分に心から甘えていること
- ・子どもたちに「先生大好き」と言われる事

子どもと信頼関係を築くことができたり、子どもに頼られる存在になるなど、子どもと良好な関係を築くことは保育士の業務上遂行すべき事柄であると同時に喜びを感じることができる場面である。前述の子どもの笑顔を見ることができると同様に、経験の浅い保育士にとって、比較的早い時期に経験する喜びの一つであることが推測される。また記述内容から、経験が豊かな保育士にとっても大切な喜びになっていることも伺える。

⑤ 「子どもと関わるのが楽しい」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・子どもと楽しい時間が過ごせる
- ・子ども達と関わる時間はとても充実し楽しい
- ・仕事が（子どもと関わっていること）楽しい
- ・子どもと関わる事が、保育士になってからの方がより楽しいと感じるようになった
- ・毎日子どもたちと様々な遊びをするなどの関わりの中で、私自身も楽しい時間を過ごせている

《経験年数4年以上10年未満》

- ・大好きな子どもと、ずっと真剣に向き合える
- ・何よりも毎日かわいい子どもたちと楽しく過ごせることが幸せ
- ・なりたくてなった職業なので、毎日子どもと触れ合えることが幸せに感じる
- ・子どもにとっての貴重な時間を過ごせることが嬉しい

《経験年数10年以上》

- ・子ども達と過ごす時間は楽しい！！
- ・子どもとの関わりの中で、子育てのすばらしさや楽しさを毎日感じていられたこと
- ・毎日、元気な子どもたちと楽しく過ごせることは幸せです
- ・子どもが好きなので毎日一緒に過ごし、経験、体験を共にできることがうれしい

- ・経験を重ねるごとに子どもという時間が楽しく感じます

経験年数を問わず記述が多かったことから、子どもと関わることを楽しみとする保育士が多いことが分かる。子どもと関わることを楽しみ、喜びと覚くことは保育士の道を選択する動機にもなっており、働き始めても、また働き続けても持続した感情を持ちつづけている様子が伺えるとともに、仕事をする上でも大きな喜びになっている。

⑥「自分自身が笑顔・元気になる・癒される」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・毎日子ども達の笑顔に触れ、自分も笑顔で働く事が出来る
- ・子ども達と触れ合う中で、自分自身も元気になる
- ・子どもと共に生活出来る事（子どもから夢、元気をもらえる）
- ・どんな時でも、子どもの元気、笑顔を見る事で励まされる
- ・子どもの素直な言葉・表情を沢山見ることで「頑張ろう!」と思える

《経験年数4年以上10年未満》

- ・子どもたちの笑顔に触れ元気をもらえる
- ・子どもから笑いをたくさんもらっている
- ・毎日、一日一回以上笑えること
- ・子どもたちに癒される

《経験年数10年以上》

- ・悩んでいる事があっても、元気になる
- ・日々子ども達と過ごしてエネルギーをもらっている
- ・子どもたちの笑顔や元気にいやされたり、日々楽しくすごすことができる
- ・子どもたちの素直な気持ちや笑顔を見ると癒され頑張ろうと思える
- ・仕事をする事で逆にストレスを発散できること

この項目は、保育者が子どもによって支えられている一面をみることができる。日常の業務のなかで困ったことやつらい事があつたとしても、子どもに元気をもらい勇気づけられている様子が伺える。同時に、子どもとともに時間を過ごすことで保育士のモチベーションが上がっている情景が見てとれる。

⑦「自分の育児の参考になる」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・将来、自分が子育てをする時に勉強になる
- ・母親になった時のための勉強になる
- ・発達について勉強でき、自分の子育てにも役立つこと

《経験年数4年以上10年未満》

- ・自分の育児の見本となった
- ・0歳児担任になるとこれから産まれてくる子ども（自分の）を育てるヒントがもらえるから
- ・成長、発達面など母親になっても活かすことのできる知識がつく
- ・自分に子どもはいないが、今後母になる身として離乳食や育児を含め力になる

《経験年数10年以上》

- ・赤ちゃんの排泄、ミルク等など（今後に役立つ）子育て
- ・自分の子どもへの成長過程において、ヒントとなるものを得ることができた
- ・我が子や孫の子育てに余裕があること
- ・自分の子どもに対しても様々な学びがある

自分自身に子どもがいても、いなくても、自分の子育てに役立っている、あるいは将来役立つだろうと感じている保育士が多い。

⑧「保護者の感謝・信頼・関係構築・共有」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・保護者に「ありがとう」と言われた時
- ・子ども達の成長を身近で感じられること、それを同僚や保護者と喜び合えること
- ・毎日「ありがとうございました」と保護者から声をかけてもらえる
- ・保護者にありがとうと言われた時が一番うれしい
- ・保護者に「保育所に来てよかった」と言われたこと
- ・保護者から「先生がいて良かった」「任せられる」と言ってもらえた時
- ・保護者の方に一年を通して「先生らしくなったね!」と言われた時

《経験年数4年以上10年未満》

- ・保護者が頼りにしてくれる
- ・保護者からのお礼の言葉、お手紙
- ・「先生が担任でよかった」と保護者に言ってもらえたこと
- ・職場を退職する時、保護者の方々にねぎらいの言葉をたくさんいただいたこと

- ・子どもを通して、保護者、子どもたちとの信頼関係ができること
- ・保護者が「ありがとうございました」と笑顔が見られる

《経験年数10年以上》

- ・親から「先生が担任でよかった」と言われた時（自分の頑張りが伝わったと感じた）
- ・同じ母親として保護者と共感できる部分がある
- ・子どもや保護者が喜んでくれることがうれしい
- ・保護者から感謝される機会に恵まれること
- ・子どもの成長を保護者と一緒に喜びあえること
- ・子どもの成長を通して保護者に喜んでもらえた時、良かったと思う

自分自身の保育の評価者の一人は保護者である。子どもの保護者から感謝の言葉を受けることは保護者の満足感の表れであり、保育者自身の保育を良く評価していることでもある。子どもとの信頼関係もさることながら保護者との信頼関係を築くことは保育者にとっても重要な役割であり、そのことを達成できた保育士の喜びが伺える。また、先述の「子どもの成長を見ることができる・感じるができる」を保護者とも共有できることが保育者としての喜びを増していることが伺える。

⑨「自分が成長する・した」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・子どもと共に自分も成長出来る
- ・普段知ることのできない病気、感染、障害について実際に見て経験できたり学んだりできる。
- ・人前で何かをすることが苦手でなくなった
- ・積極的に色々な事に挑戦するようになった
- ・社会人として、人として成長できること
- ・色々な人との関わりの中で、自分自身の考えや行動等成長できた
- ・反省から学ぶことが多く、自分も成長できること
- ・礼儀をきちんと覚えた
- ・人の気持ちを考えようとするようになった

《経験年数4年以上10年未満》

- ・子ども達の成長を通して、自分自身の成長にもなっている
- ・人間的に大きく成長させてもらっている
- ・日々、新しい気づきや学びがありどんどん自分が成長できる
- ・子どもと共に、自分も成長できる、日々学習

- ・精神的にも肉体的にも強くなれたこと
- ・職場、保護者、子ども達など、色んな人と出会い交流する中で、自分自身人間として成長していける
- ・子どものそばにいと小さな季節の変化にも気付くようになり、四季や節句を大切にできるようになった
- ・いろいろな障害の子と接することで、自分でも知ろうと勉強し、知識として自分のものにしてきたこと

《経験年数10年以上》

- ・人が人を育てる現場の中で、自分自身も保護者、子ども、同僚から学んでいく事が何年経ってもあり、人として成長していける事
- ・子どもと触れ合い保護者と関わることで自分の成長にもつながり視野が広がった
- ・子どもがさらに好きになり、知識も広がることで、いろいろな分野が学べる事
- ・保護者や地域の人と関わることで、自分の世界が広がり、成長を感じる
- ・10年以上たち、やっと保育士らしく行動したり、対応したりできるようになったと感じられること
- ・いろいろな人に出会えることで十人十色なのが人としてあたり前と思え、子育てや人生観にプラスになった
- ・自分自身を向上・意欲・好奇心をもって生活出来る事、自分を成長させる

多くのことを経験し、その中でたくさんの困難な場面にも遭遇する反面、自分自身が成長していることを実感する保育者が多い。子どもの事や保育に関する知識や技術の向上を始め、人間的にも成長していると感じている。経験年数が多くても自分自身の成長を実感している保育士も多く、常に学ぼう、向上しようとする姿が伺える。

⑩「自分自身の保育の結果・達成感を感じる」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・保育が上手くいき、子ども達が楽しんでもくれたこと
- ・絵本を読んだり、出し物をした時に、子どもや保護者等が笑顔になってくれた時
- ・調べていったゲームなどをやってみて「楽しかった！」「もう一回やりたい！」と楽しんでもくれた
- ・行事や目標に向かってやりとげた時の達成感は気持ちがいい
- ・準備すればその分楽しんでいる姿が見られ手応えを感じられる

《経験年数4年以上10年未満》

- ・子ども達と行事にむけて取り組みやり遂げた時
- ・自分の環境の作り方、関わりの工夫で子どもが変化した時の嬉しさを感じられること
- ・沢山の子どもや保護者と接する事が出来、頑張った分だけ結果が返ってくる場所
- ・仕事内容は決して楽ではないが、自分がしてきた保育で子ども達の成長が見えたとき
- ・毎日、子どもの様子が違うので、楽しいし教えた事を覚えてくれると嬉しい

《経験年数10年以上》

- ・子ども達と一緒に取り組んだことがまとまり、1つの形となった時の達成感を持てた時
- ・好むパネルシアターや体操を子ども達が喜んでくれること
- ・行事が終わったとき、作り上げたという喜びを感じる
- ・自分の計画した活動を子どもが楽しんでいる姿が見れる
- ・自分によって子ども達をどの様にも育てていく事が出来るということ

保育士が自分自身で保育の結果や達成感を感じることが出来る場面についての記述である。行事や様々な活動を子どもとともにやり遂げた時の喜びが伺える。また、保育者が試行錯誤して計画立案した活動や関わりによって、子どもが楽しみ、変化することも保育士にとっての大きな喜びになっている。

⑪「充実した日々を過ごすことができる」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・行事や給食があることで、季節感を感じ、充実した一年を過ごせること
- ・1日1日充実した生活を送れること
- ・子どもたち一人ひとりの成長を日々感じ、毎日充実していること
- ・大変なこともあるけど、日々充実していると感じられる

《経験年数4年以上10年未満》

- ・小さい頃からずっと育てて卒園させる充実感
- ・笑ったり、泣いたり毎日同じ日はなく、とても楽しいこと
- ・大変と思うことも多いが充実した日々を送っている

《経験年数10年以上》

- ・毎日がとても充実している
- ・子どもの人生に関われる充実感が味わえる
- ・人とつながりあいながら自分は生きているということが実感できる場所

日々の子どもの成長を実感することによる充実感や、長期間に渡って関わった子どもが保育所を巣立つことに喜びや充実感を味わうなど、充実を感じる要因は様々である。日常的に困難を感じる場面も多いが、充実感を実感する場面も多いと感じている様子が伺える。

⑫「いろいろな人との関わり」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・ 人に関わる仕事ができる
- ・ 子ども達に出会えたこと
- ・ 人と関わる事が多いのでいろんな考え方が知れる
- ・ 優しい先輩、尊敬できる先輩と一緒に仕事ができていること

《経験年数4年以上10年未満》

- ・ 年齢に関係なく、同じ保育士としての仲間ができたこと
- ・ 大好きな子ども達に囲まれ、創立者の理念を基に信頼できる施設長、同僚と保育できること
- ・ 大好きな子ども、信頼できる上司に恵まれたこと

《経験年数10年以上》

- ・ 頼れる先輩や同僚の保育士に出会えたことが幸せです
- ・ 素敵な仲間（保育士）にめぐりあうことができた
- ・ たくさんの出会いがあること（子どもたち、保護者、同僚）
- ・ 地域の方々や保護者の方々と仕事を通して知り合い、保育を通して地域への貢献ができたこと

経験の浅い保育士は、子どもたちや保護者、同僚・先輩の保育士との関わりに喜びを感じ、経験年数が増えるにつれて地域社会や他の地域の保育者等、関わる人間関係に広がりが見られる。人間が相手の保育士にとって、人との関わりや繋がりは喜びであると同時に、大きな魅力の一つになっている。

⑬「その他」に関する記述

《経験年数3年以下》

- ・ 昔からの夢が叶った
- ・ 好きな仕事ができている
- ・ 得意な分野を発揮できる
- ・ 安定している
- ・ 給食が食べられる

- ・子どもの人生の一部に関われる
- ・規則正しい生活をおくれること
- ・職場の環境が良い

《経験年数4年以上10年未満》

- ・自分の夢が叶った
- ・子どもが「大きくなったら保育園の先生になりたい」と言ってくれたこと
- ・卒園した子が親しみをもって挨拶をしてくれたとき
- ・資格を生かし、自分の好きな「子ども」のそばで働けるから
- ・幼小の頃の夢であり、思いが伝わる時がやりがいを感じています
- ・自分の得意な面を活かした
- ・自分自身を活かした仕事ができる
- ・目標を持って、仕事ができる
- ・デスクワークとは違い、日々違う出来事がありそれを肌で感じられる仕事であること
- ・毎日手作りの美味しい給食が食べられる
- ・天職だと思います

《経験年数10年以上》

- ・仕事が安定している
- ・育休などの制度がしっかりしていたので仕事を続けられた事
- ・自分の持ち味を発揮できる
- ・自分の得意なことが仕事にいかせる
- ・季節を感じながら仕事ができる
- ・園を卒園した後も園外で声をかけてもらい、大きくなった姿を見れる
- ・長年やってきて子供が親になって、また再会できたこと
- ・自分の仕事に対して熱くなれるところ
- ・いつまでも若くいられる
- ・身体を常に動かしている為、比較的健康に過ごせている事
- ・自分にあうと思われる“職業”を持って生活できたこと
- ・自分は足りない所もたくさんあるが、周りの人に支えられていることを実感できること
- ・子どもたちとのかけがいのない存在になれたりつながりがもてること
- ・幼い頃からの夢であった保育士になれて、小さい子どもといつまでもかかわり続けることができること

「その他」の記述は上記にある通り、非常に多岐に渡る。仕事として安定していることや、

好きな仕事であること、幼いころからの夢、四季を感じることができる、得意なことを活かせるなど、経験年数に関わらず様々な魅力を感じていることが記述内容から伺える。「天職だと思います」の記述は印象深く、保育士であることの喜びが強く表れている。

「保育になって良かったこと」の記述内容について見てきたが、やりがいや子どもの成長に触れることの喜び、様々な経験や体験を通して自己成長できることなど、保育士の仕事の魅力は多岐に渡り、保育士自身もその喜びの中で仕事をしている様子を伺い知ることができた。前項で「保育士として困っていること」の記述にも見られるように、保育士の業務には様々な困難な場面がある一方、それを補って余るほどの喜びがあることが見て取れた。しかし、反面では一抹の不安を感じる部分もある。それは、「保育士になって良かった」と感じる場面の多くが、子どもの関わりを通じた感情や自己達成感といった部分に偏っていることである。違う表現を用いれば、子どもとの関わりを通じた喜びや自己達成感、仕事への充実感を見出せなくなった時には、保育士を続ける動機が大きく失われることが推察される。仕事の内容に大きな喜びを見出すことができることはもちろん好ましいことであるが、一時的にでも喜びが失われたとしても働き続けることの動機となる職場環境や処遇の向上といった要件を整備していくことも重要であると感じる。